秋田県文化財調査報告書第191集

東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅵ

—石神遺跡—

1990・2

秋田県教育委員会

秋田県埋蔵文化財センター

東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅵ

—石神（いしがみ）遺跡—

1990・2

秋田県教育委員会

序

本県には先人の残した多くの文化財が残されています。この貴重な文化財を保護し継承していくことは、私たちの現在と未来にとって必要欠くべからざることであります。

このたび秋田県の高速交通体系の根幹となる東北横断自動車道秋田線が計画され、路線の一部が石神遺跡を通過することになり、工事に先立って発掘調査を実施いたしました。

その結果、縄文時代の竪穴住居跡や中世の空堀などが発見されました。

本書は、これらの調査成果をまとめたものでありますが、埋蔵文化財保護へのご理解と郷土の歴史解明にご活用いただければ幸いです。

最後に本書を刊行するにあたり、ご援助、ご協力を賜りました日本道路公団仙台建設局、大曲市教育委員会並びに関係各位に対し心からの感謝を申し上げます。

平成２年１月20日

秋田県教育委員会
教育長　橋　本　顕　信

例　言

1．本報告書は、東北横断自動車道秋田線の建設工事に係る埋蔵文化財の発掘調査のうち、昭和63年度大曲市内小友地区所在の石神遺跡の調査報告である。

2．本書の執筆は、小畑　巌と磯村　亨が分担した。第４章　第１節遺構と遺物のうちＴピット・第５章　１．縄文時代の遺構と遺物についてのうちＴピットについてを磯村が、その他の部分を小畑が担当した。

3．本書に掲載した地形図は、国土地理院発行５万分の１「大曲」である。

凡　例

1．柱穴に付した数字は、プラン確認面からの深さを表わす。(単位cm)

2．各遺構に付している略記号は次の通りである。

ＳＩ……竪穴住居跡　　ＳＫ……土坑

ＳＫＴ……Ｔピット　　ＳＤ……溝状遺構・空堀

3．遺構の土層及び遺物の色調の記載は、「新版　標準土色帳」(日本色彩研究所)を使用した。

目　次

序
例　　言 …… ii
目　　次 …… iii
第１章　はじめに …… 1
　第１節　調査に至るまで …… 1
　第２節　調査の組織と構成 …… 1
第２章　遺跡の立地と環境 …… 2
　第１節　自然的環境 …… 2
　第２節　歴史的環境 …… 3
第３章　発掘調査の概要 …… 6
　第１節　遺跡の概観 …… 6
　第２節　調査の方法 …… 6
　　１．調査区の設定 …… 6
　　２．発掘調査方法 …… 6
　第３節　調査経過 …… 11
第４節　調査の記録 …… 13
　第１節　遺構と遺物 …… 13
　　１．縄文時代 …… 13
　　２．中　　世 …… 24
　　３．時期不明遺構 …… 24
　第２節　遺構外出土遺物 …… 26
第５章　まとめ …… 31
　陥し穴について …… 31
　中世における石神遺跡について …… 32

挿　図　目　次

第１図　遺跡周辺の地形図 …… 2
第２図　周辺の遺跡 …… 4
第３図　遺構配置図 …… 7・8
第４図　南側斜面地形測量図 …… 9
第５図　南側斜面Ａ・Ｂトレンチ
　　西壁断面図 …… 10
第６図　遺構集中地区配置図 …… 14
第７図　SI01竪穴住居跡実測図 …… 15
第８図　SK02・SK04・SK09土坑実測図 …16
第９図　SK02土坑出土遺物 …… 17
第10図　SK02・SK04・SK09土坑
　　出土遺物 …… 18
第11図　SKT01・SKT02陥し穴
　　実測図 …… 19・20
第12図　SKT03陥し穴実測図 …… 21
第13図　SKT04陥し穴実測図 …… 22
第14図　SKT05陥し穴実測図 …… 22
第15図　SKT06陥し穴実測図 …… 23
第16図　SK01・SK03・SK05・SK06
　　・SK08土坑実測図 …… 25
第17図　SD01溝状遺構実測図 …… 27・28
第18図　遺構外出土遺物（１） …… 29
第19図　遺構外出土遺物（２） …… 30
第20図　石神遺跡・六郎沢館
　　立地関係図 …… 34
付　図　SD02空堀実測図

表　目　次

第１表　周辺の遺跡一覧表 …… 5
第２表　秋田県内陥し穴検出遺跡
　　一覧表 …… 35・36

図　版　目　次

図版１　１　遺跡遠景（１）（西→東） …… 37
　　２　遺跡遠景（２）（西→東）
図版２　１　遺跡遠景（３）（南東→北西） ……38
　　２　遺跡から六郎沢館を望む（東→西）
図版３　１　SI01竪穴住居跡完掘状況(南→北)… 39
　　２　SK04土坑遺物出土状況
　　（南西→北東）
図版４　１　SKT04陥し穴土層断面(南東→北西)…40
　　２　SKT01(上)・SKT02(下)陥し穴
　　完掘状況（西→東）
図版５　１　SKT03陥し穴完掘状況（東→西）……41
　　２　空堀調査前の状況（西→東）
図版６　１　空堀土層断面（北西→南東） ……42
　　２　空堀土層断面（西→東）
図版７　１　SK03土坑土層断面（南→北） ……43
　　２　SK04土坑出土土器
図版８　SK02土坑出土土器(上)・(下) ……44
図版９　１　SK09土坑出土土器 ……45
　　２　遺構外出土土器
図版10　遺構外出土遺物 ……46

第１章　はじめに

第１節　調査に至るまで

秋田県の高速交通体系の基幹となる東北横断自動車道秋田線の建設は、昭和46年日本道路公団によって計画された。これは、秋田市―横手市―岩手県北上市を結ぶ全長約108kmの高速道路である。昭和54年11月に日本道路公団仙台建設局長から秋田県教育委員会教育長あてに、計画路線内に所在する埋蔵文化財包蔵地の分布調査の依頼があった。これを受けて秋田県教育委員会は、昭和55・56年に第１次の遺跡分布調査、昭和58年に第２次の遺跡分布調査を行い、路線上に37箇所の遺跡があることを報告した。これに基づいて協議の結果、工事によって消滅してしまう遺跡について緊急発掘調査を行い、記録保存の処置を講じることが合意された。

発掘調査は、昭和60年度に河辺町に所在する石坂台Ⅳ・Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ・Ⅸ、松木台Ⅲの６遺跡、昭和61年度に協和町に所在する上ノ山Ⅰ・Ⅱ、館野Ⅰ、半仙の４遺跡が、昭和62年度に半仙（協和町）、寺沢・上野台（西仙北町）、小出Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・大畑潜沢Ⅲ（南外村）、下田（大森町）、手取清水（横手市）の９遺跡の調査が行なわれた。そして昭和63年度は、小出Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ、石神・太田・下田谷地（大曲市）、竹原・上猪岡（横手市）とのちに遺跡であることが確認された北田山田ケ沢Ⅰ・Ⅱの合計11遺跡が調査されたのである。

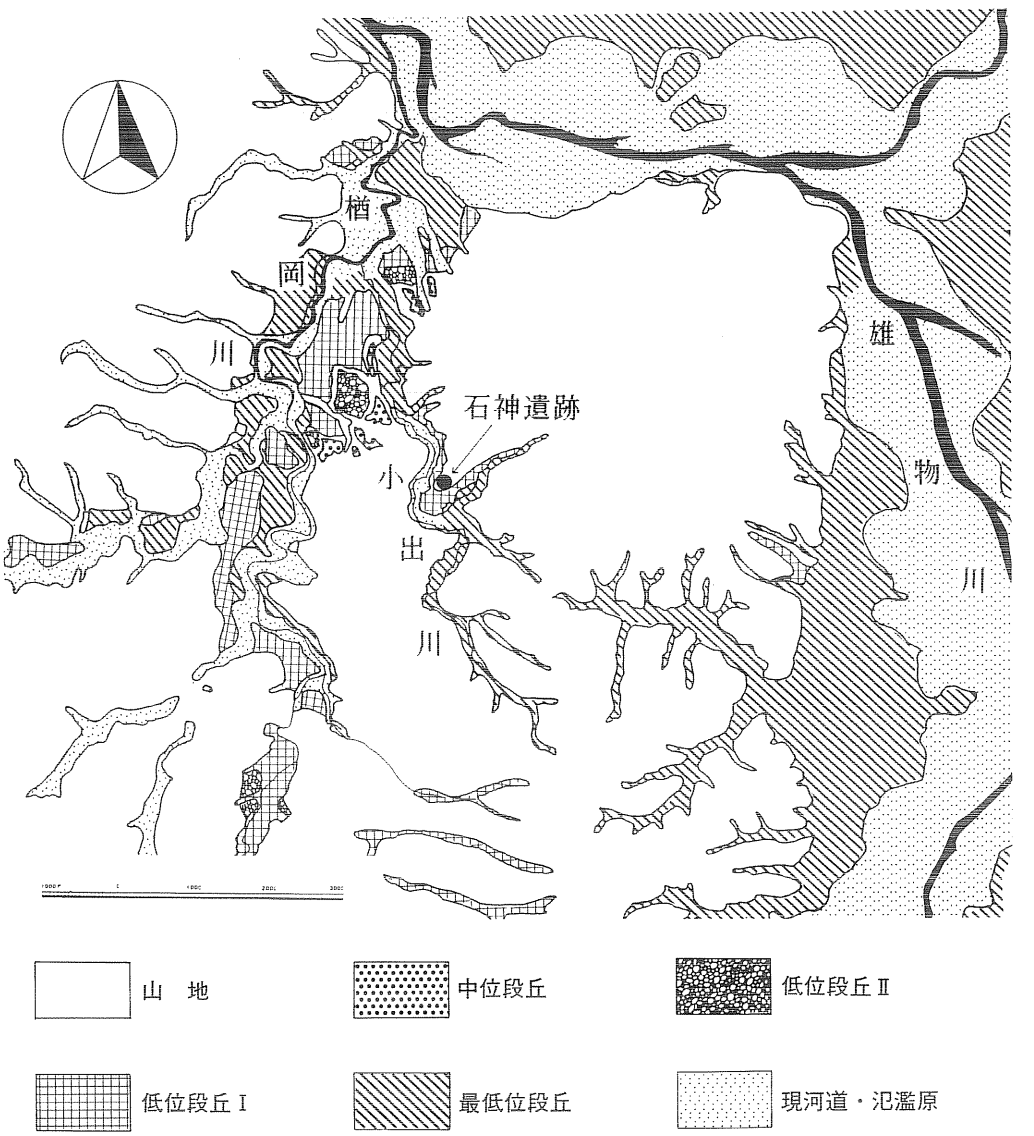
第２節　調査の組織と構成

調査主体者	秋田県教育委員会	
遺跡所在地	大曲市内小友字石神98－１、99	
調査対象面積	11,000㎡	
調査面積	4,600㎡	
調査期間	昭和63年５月９日～８月５日	
調査担当者	小畑　巌	秋田県埋蔵文化財センター学芸主事
	磯村　亨	秋田県埋蔵文化財センター非常勤職員
総務担当者	加藤　進	秋田県埋蔵文化財センター主査（平成元年３月転出）
	佐田　茂	秋田県埋蔵文化財センター主査（平成元年４月転入）
	高橋忠太郎	秋田県埋蔵文化財センター主事
調査協力機関	日本道路公団秋田工事事務所　大曲市教育委員会	
	大曲市内小友公民館	

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　自然的環境（第１図）

大曲市は横手盆地のほぼ中央西部に位置する。雄勝郡雄勝町雄勝峠に源を発する雄物川は大曲市の西側を北上し、市街地北西部において玉川と合流した後流路を西方向に変える。その後南外村を南北に貫流する楢岡川と南外村西板戸において合流し、北西方向に再び流路を変えて



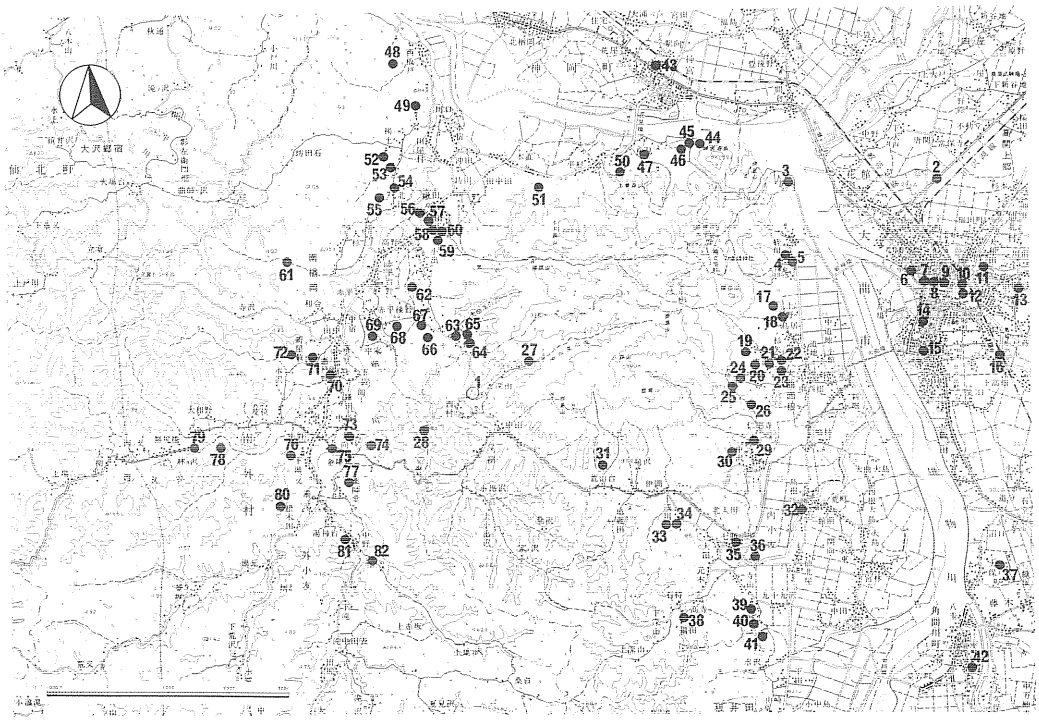
第１図　遺跡周辺の地形図

流れる。雄物川と楢岡川の間には、姫神山、神宮寺岳、八森山、土大森山、矢向峠などの標高100m～400m近い低山地が広がっている。大曲市と南外村及び神岡町の境界は、この低山地の尾根づたいに画されている。この低山地に発達した大小の沢と、楢岡川とその支流の小出川等によって段丘が形成されている。これらのほとんどは水田耕作に利用されており、遺跡の周辺も中山深山沢の豊富できれいな沢水により主に水田が営まれている。地質構造上でみると、褶曲が北北東から南南西にかけて入っている。遺跡付近では、小出川背斜が遺跡から矢向峠を結ぶ線上にみられる。

第２節　歴史的環境（第２図、第１表）

本遺跡がほぼ中央に位置する第１図で周辺の遺跡の分布をみると、雄物川と楢岡川流域に集中しているのがわかる。雄物川右岸は最低位段丘がよく発達し、支流の丸子川流域に中世の城館が多く認められる。時代をさかのぼって縄文時代後期には、館の下遺跡（10）が営まれている。雄物川左岸では、山麓地と丘陵地に遺跡の多くが立地している。宇津台遺跡（24）は、本図中数少ない弥生時代の遺跡である。成沢窯跡（22）は、平安時代に操業が行われた窯跡である。窯は半地下式の登窯で、そこで焼かれた須恵器は仙北町と千畑町にまたがる払田柵跡等に供給されたことがわかっている。中世になると、交通の要所に城館が築かれ、最低位段丘上にも三浦館（32）、七頭館（36）がみられる。

楢岡川流域は段丘地形が発達し、遺跡のほとんどは段丘上または丘陵地・山麓地に立地している。小出Ⅰ遺跡（59）、小出Ⅳ遺跡（56）からは、尖頭器、ナイフ形石器などの旧石器時代の遺物が出土しており、この地域の歴史は非常に古くまでさかのぼることがわかる。縄文時代の遺跡は19箇所をかぞえるが、すべてが同一時期に営まれたものではない。本遺跡の北東約１kmに深山遺跡（27）がある。縄文時代前期の大木２ｂ式土器が出土し、東北地方南部を中心とする文化の影響を受けたことが知られる。楢岡川流域の遺跡の分布において特筆されるのは、中世の窯跡と城館跡である。特に後者の集中は著しく、当時の勢力の一大拠点をなしていたものと想像される。楢岡城（49）は、小笠原氏の本城である。小笠原氏は、角館城戸沢氏の重臣として勢力をもち、横手城小野寺氏と敵対関係にあったとされる。中世の城館跡は14箇所にのぼるが、交通の要所や戦略上の要害の地に築かれている。中世の窯跡としては、珠洲系陶器を生産した大畑窯跡（67）が知られる。このほかに甕コ沢窯跡（61）、檜山腰窯跡（62）がある。



第２図　周辺の遺跡

参考文献

秋田県教育委員会　『秋田県遺跡地図』　（県南版）　1987（昭和62年）

佐藤清一郎　『図説大曲・仙北の歴史』　上巻　無明舎　1984（昭和59年）

秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第155集　1987（昭和62年）

秋田県教育委員会　『成沢遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第36集　1976（昭和51年）

秋田県教育委員会　『秋田県の中世城館』　秋田県文化財調査報告書第86集　1981（昭和56年）

南外村教育委員会　『南外村誌　資料篇第六集』　1982（昭和57年）

南外村教育委員会　『大畑窯跡』　1981（昭和56年）

長山幹丸　『南外村の城と館』　南外村郷土史資料　1987（昭和62年）

第1表　周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	石神	縄文（後期）・中世	42	大館城	中世
2	殿屋敷	中世	43	富樫館	中世
3	松山城	中世	44	落合（落貝）	縄文
4	蛭川Ⅱ	平安	45	小沢窯跡	平安
5	蛭川Ⅰ	平安	46	小沢	縄文（晩期）
6	石造五重塔	中世（通称：虎王丸碑）	47	愛宕下	縄文（中期）
7	大曲城	中世	48	猿倉沢館	中世
8	土屋館	縄文	49	楢岡城	中世
9	土屋館	中世	50	平形館	中世
10	館の下	縄文（後期）	51	木直沢館	中世
11	保谷城	中世	52	北田山田ケ沢Ⅰ	縄文（晩期）
12	藤原友利館	中世	53	北田山田ケ沢Ⅱ	縄文（後期）・中世
13	戸蒔城	中世	54	北田	縄文
14	大日碑	中世	55	檀ノ平館	中世
15	塩谷家・永和碑	中世	56	小出Ⅳ	旧石器・縄文・弥生
16	大槻城	中世	57	小出Ⅲ	縄文・中世
17	鳥居Ⅱ	縄文（晩期）	58	小出Ⅱ	縄文・平安・中世
18	鳥居Ⅰ	縄文	59	小出Ⅰ	旧石器～中世
19	成沢館	縄文・中世	60	山王台	縄文
20	成沢Ⅱ	縄文（後・晩期）	61	甕コ沢窯跡	中世
21	成沢Ⅲ	縄文（晩期）	62	桧山腰窯跡	中世
22	成沢窯跡	縄文・平安	63	大畑潜沢Ⅰ	縄文
23	成沢Ⅰ	縄文（晩期）	64	大畑潜沢Ⅱ	縄文
24	宇津台	弥生	65	大畑潜沢Ⅲ	縄文（後期）
25	仁応寺Ⅰ	縄文	66	大畑	縄文
26	仁応寺Ⅱ	縄文・平安	67	大畑窯跡	中世
27	深山	縄文（前期）	68	赤平後野	縄文
28	六朗沢館	中世	69	平家館	中世
29	中沢Ⅰ	縄文・平安	70	悪戸野	縄文
30	中沢Ⅱ	縄文	71	新屋布	縄文
31	荒山台	縄文	72	太郎坊館	中世
32	三浦館	中世	73	大向	縄文
33	大関	縄文	74	大向館	中世
34	太田	縄文（中・晩期）	75	大巻館	中世
35	前崎山城	中世	76	天神森館	中世
36	七頭城	中世	77	薬師堂館	中世
37	四十二館	縄文（晩期）・平安・中世・近世	78	大小手館	中世
38	高山寺城	中世	79	林ノ沢	縄文
39	九十九沢窯跡	平安	80	松木田館	中世
40	下田谷地	縄文（後期）・平安	81	中野	縄文（晩期）
41	下田	縄文（後期）・平安	82	巣ノ沢	縄文（晩期）

第３章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観（第３・４・５図）

石神遺跡は、大曲市内小友字石神98－１、99に所在する。中山深山沢と小出川とにより開析されて、あたかも半島状に突き出た低山地の突端が今回調査された場所である。調査区の標高は、53～86mであった。北西側の裾を市道大畑線が通り、南西に西村、南東の裾に深山の集落がそれぞれ営まれている。また、遺跡の南約150mの小山に観音様が祭られている。遺跡のほぼ中央部に北東から尾根が入っている。その北側は急傾斜で一旦落ち込んだのちテラス状の平坦面をつくり、さらに傾斜して市道大畑線の面に達する。尾根の南側は、緩やかに傾斜したのち、水田面まで急角度で落ち込んでいる。遺跡の現況は山林であるが、戦後に開墾が行なわれて、畑として利用されていたという。また、南側の斜面は、段々畑状に造成されていた。水田との比高差は、22～27mを測る。遺跡の土層は、前述のように開墾が行なわれたため、尾根の南側の比較的傾斜の緩やかな部分では20cm前後の厚さの耕作土の直下に地山が観察された。その地山も耕作によりやや削平されているものと推測される。尾根の北側のテラス状の平坦部では、黒色土の堆積が約30～50cmとやや厚く、表土・地山漸移層・地山という堆積を示していた。

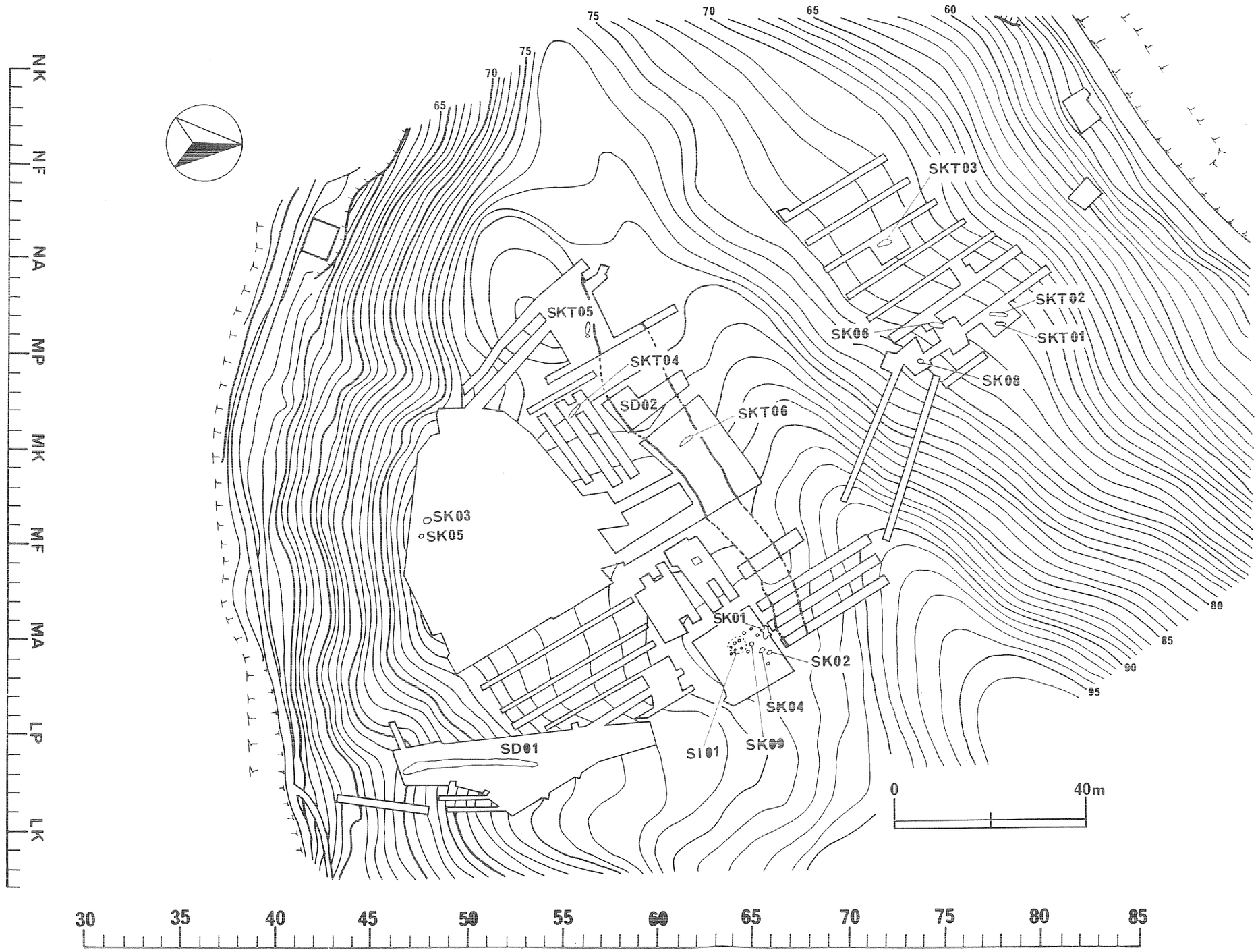
第２節　調査の方法

１．調査区の設定

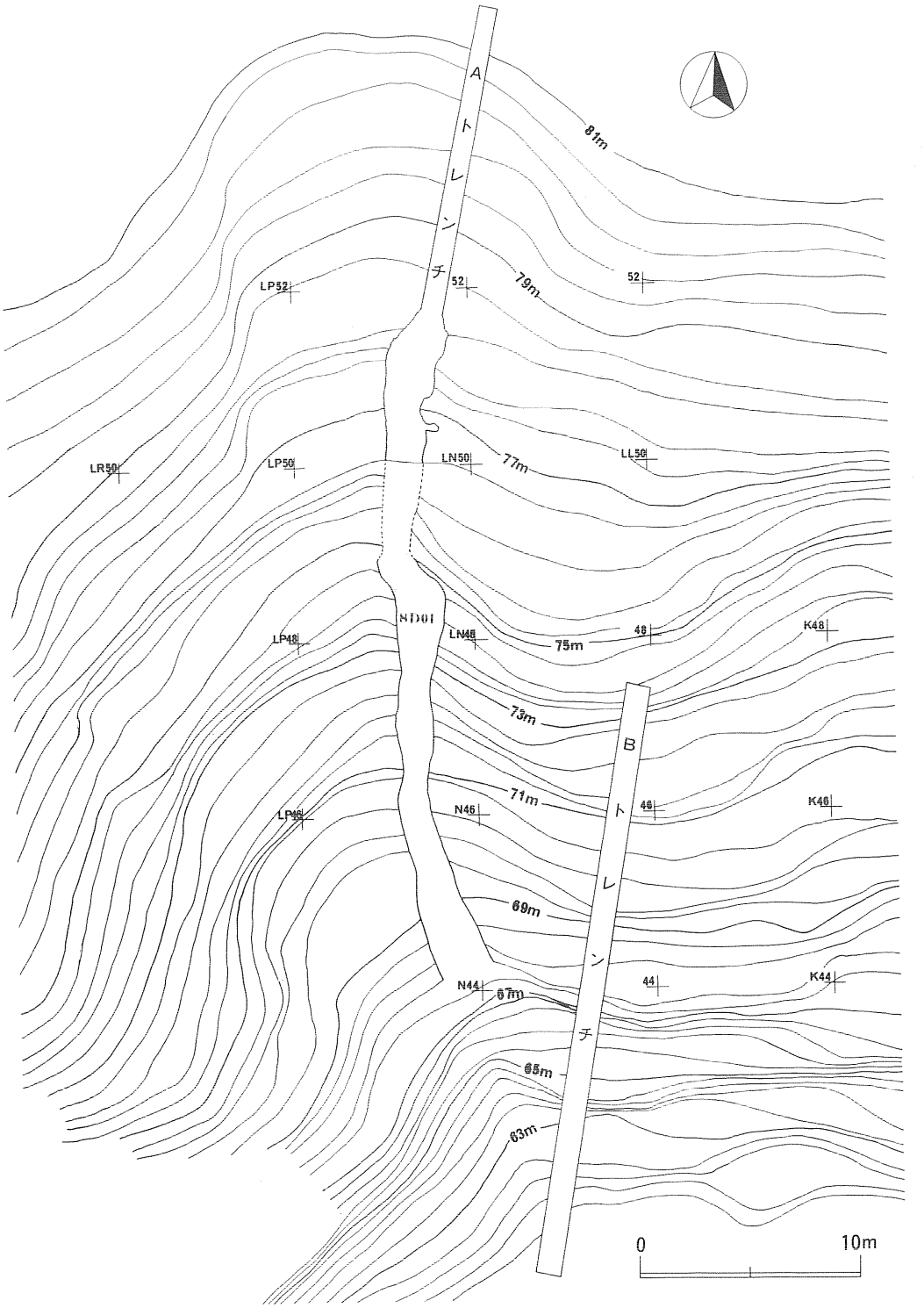
遺跡内に所在するセンター杭STA266＋00を原点として、国家座標第Ⅹ系座標北を求める。この座標北のラインを南北基線Ｙ軸とし、これに直行するラインを東西基線Ｘ軸とする。この直行する基線をもとに調査対象区域に４×４mの方眼(グリッド)をつくるよう杭を打設した。基準交点STA266＋00をMA50とし、Ｙ軸に２桁のアラビア数字、Ｘ軸に２文字のアルファベットを付し、各グリッドの南東隅の杭で両者を組み合わせてグリッド名とした。

２．発掘調査方法

範囲確認調査によって、地山まで耕作を受けている部分と受けていない部分があることが判明していた。前者については、耕作土を取り除いて地山面で遺構のプラン確認を行うこととした。後者については、耕作土を除いてからと地山面で２回プラン確認をすることを原則とした。当初予定では、調査区全域の表土を除去することとしたが、遺構、遺物の密度が小さいことか


NK
NF
NA
MP
MK
MF
MA
LP
LK
30
35
40
45
50
55
60
65
70
75
80
85
75
70
65
60
75
70
65
80
85
90
95
SKT03
SKT02
SKT01
SK06
SK08
SKT05
SKT04
SD02
SKT06
SK03
SK05
SK01
SK02
SK04
SK09
SI01
SD01
0
40m

第３図　遺構配置図



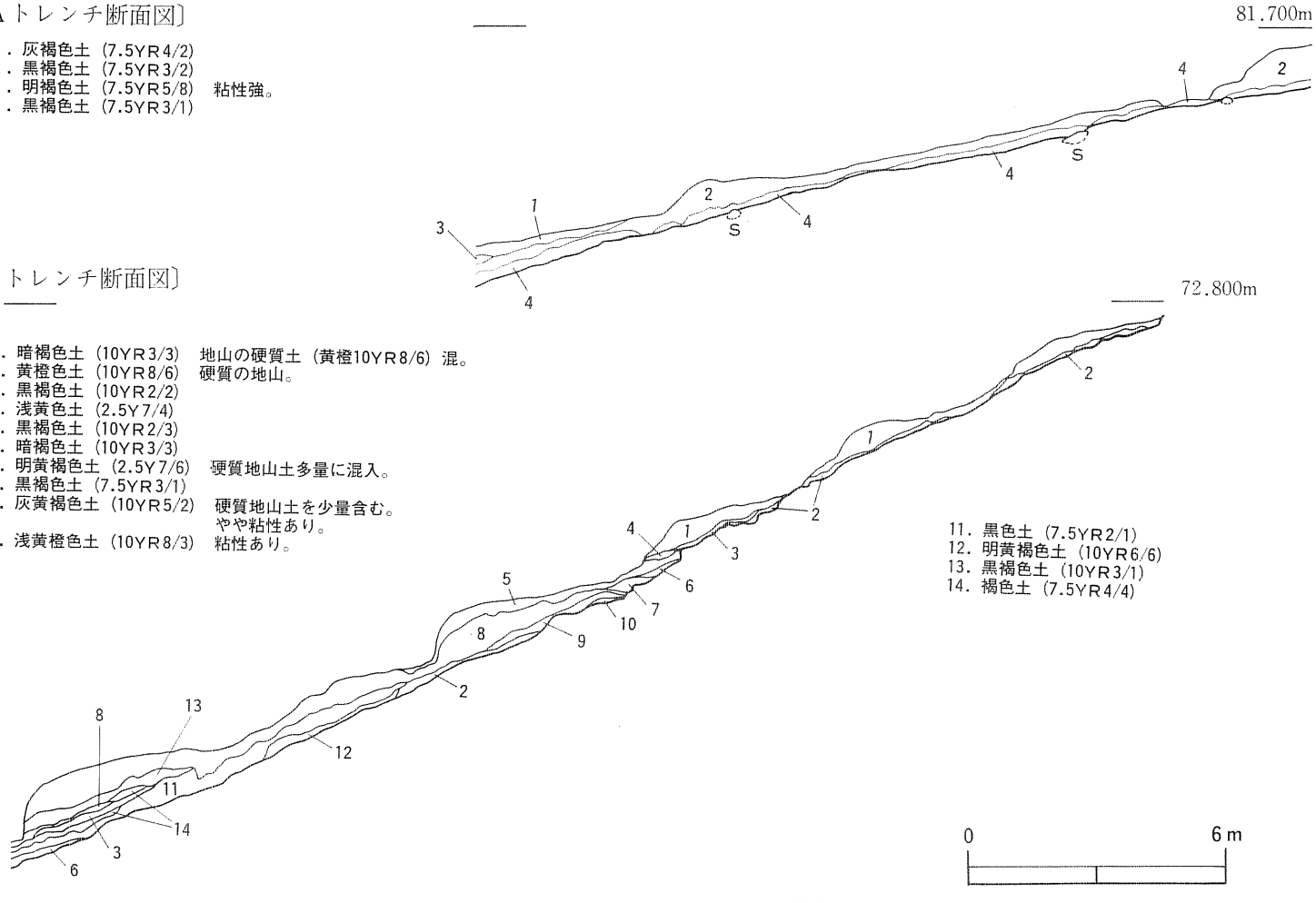
第４図　南側斜面地形測量図

〔Ａトレンチ断面図〕

1．灰褐色土（7.5YR4/2）
2．黒褐色土（7.5YR3/2）
3．明褐色土（7.5YR5/8）　粘性強。
4．黒褐色土（7.5YR3/1）

〔Ｂトレンチ断面図〕

1．暗褐色土（10YR3/3）　地山の硬質土（黄橙10YR8/6）混。
2．黄橙色土（10YR8/6）　硬質の地山。
3．黒褐色土（10YR2/2）
4．浅黄色土（2.5Y7/4）
5．黒褐色土（10YR2/3）
6．暗褐色土（10YR3/3）
7．明黄褐色土（2.5Y7/6）　硬質地山土多量に混入。
8．黒褐色土（7.5YR3/1）
9．灰黄褐色土（10YR5/2）　硬質地山土を少量含む。やや粘性あり。
10．浅黄橙色土（10YR8/3）　粘性あり。



11．黒色土（7.5YR2/1）
12．明黄褐色土（10YR6/6）
13．黒褐色土（10YR3/1）
14．褐色土（7.5YR4/4）

第５図　南側斜面Ａ，Ｂトレンチ西壁断面図

らトレンチによる調査に切り替え、遺構プランを確認した段階でその部分を拡張することとした。

記録は、図面による記録と写真による記録を行った。図面による記録は、土層断面図・遺物出土状況図・平面図とし、必要に応じてエレベーション図を作成した。縮尺は、1/20または1/40を原則とした。写真による記録は、調査の様子を順を追って記録することにした。

第３節　調査経過

５月９日調査開始日。伐採された木の枝葉が調査区内に散乱していたので、調査の支障にならないようかたずける作業を行った。５月10日道路公団横手工事事務所佐久間庶務課長が来跡され、作業の状況を見学された。５月11日伐採木のかたずけを終えて、発掘に着手した。排土場所を南と北の斜面部に確保するために、その部分から調査を始めた。また、遺跡の遠景と近景、作業状況の写真撮影を行った。５月16日南斜面に段々畑状の造成がみられたので、地形測量を開始した。５月27日調査で出た土が崩壊しないよう、土止め柵を築いた。南斜面で溝状の遺構を検出し、SD01とした。また、斜面に沿って設定したトレンチの土層断面を写真撮影した。５月30日ベルトコンベアー７台を遺跡平坦部まで運び上げる作業を行った。５月31日範囲確認時に検出された積み石状の遺構及び段々畑状の造成は、戦後になされた開墾によるものと判明した。６月８日SD01溝状遺構のプラン検出状況を写真撮影し、土層観察用ベルトを設定して中を掘り始めた。６月16日SD01溝状遺構の埋土中には大小の礫が含まれ、土層の断面形は逆台形を呈する。平坦部の遺構プラン確認作業も同時に行った。６月20日SD01溝状遺構の平面実測を終え、完掘状況写真を撮影した。６月23日平坦部の遺構プラン確認作業の結果、土坑１基を検出した。６月30日遺構、遺物の密度が非常に低いため、トレンチ調査に切り替え、遺構プランを確認した段階で拡張することにした。さっそく平坦部と北側テラス部分にトレンチを設定し、一部を掘り始める。７月５日平坦部地山面で柱穴と焼土を検出した。柱穴は焼土を取り囲むように配されていたため、竪穴住居跡と判明した。壁は耕作により失われてしまったものと思われた。北側テラス部分のトレンチ調査の結果、土坑４基、陥し穴３基を検出した。７月６日SD02とした空堀の調査前の状況を撮影した。テラス部分の検出遺構の調査に着手した。７月12日SKT01・02陥し穴の土層観察と実測を行った。SD02の埋土の状況は、上部が耕作による攪乱された層、それ以下は自然堆積の状況を呈している。７月13日SK04土坑の調査を行ったところ、底面から少し浮いた状態で小型の壷形土器が横位で出土した。MB60,MC60,MD62,ME61の各グリッドの耕作土と地山の境目からフレーク４点が出土した。このため出土地点を中心に拡張して調査中である。７月18日北側テラスの遺構(SKT01・02・03、SK06・08)の完堀状況の写真撮影

を行った。７月19日MQ57グリッドで陥し穴を検出し、SKT05とした。７月20日SK08土坑と重複していたSK10土坑の調査に着手した。調査の結果、撹乱であることがわかった。７月25日SI01竪穴住居跡のまわりでみつかった土坑(SK02・09)の遺物収納を行った。７月26日SD02の断面は、北側がダラダラと緩く立ち上がるのに対して、南側が急角度で立ち上がっている。本遺構は、尾根に沿って掘られているが、北東側の標高が高いほうの掘り込みが浅く、南西側に向かうにつれてだんだん深くなり、MM58グリッドのあたりで最も深くなる。さらに南西に向かうと逆に浅くなり、ついには掘り込み自体不明確になってしまう。７月29日SD02の埋土を除去していたところ、MJ61グリッド内で陥し穴を検出しSKT06とする。８月２日SD02の平面図、SKT06の土層断面図を作成した。８月５日SKT06の平面図を作成し、すべての調査を終了した。

第４章　調査の記録

第１節　遺構と遺物

本遺跡で検出された遺構は、竪穴住居跡１軒(縄文)、土坑８基(縄文３、時期不明５)、溝状遺構１条、空堀１条、である。以下に、時代ごとに各遺構と出土した遺物について述べたい。

１．縄文時代

①竪穴住居跡

SI01竪穴住居跡（第７図、図版３）

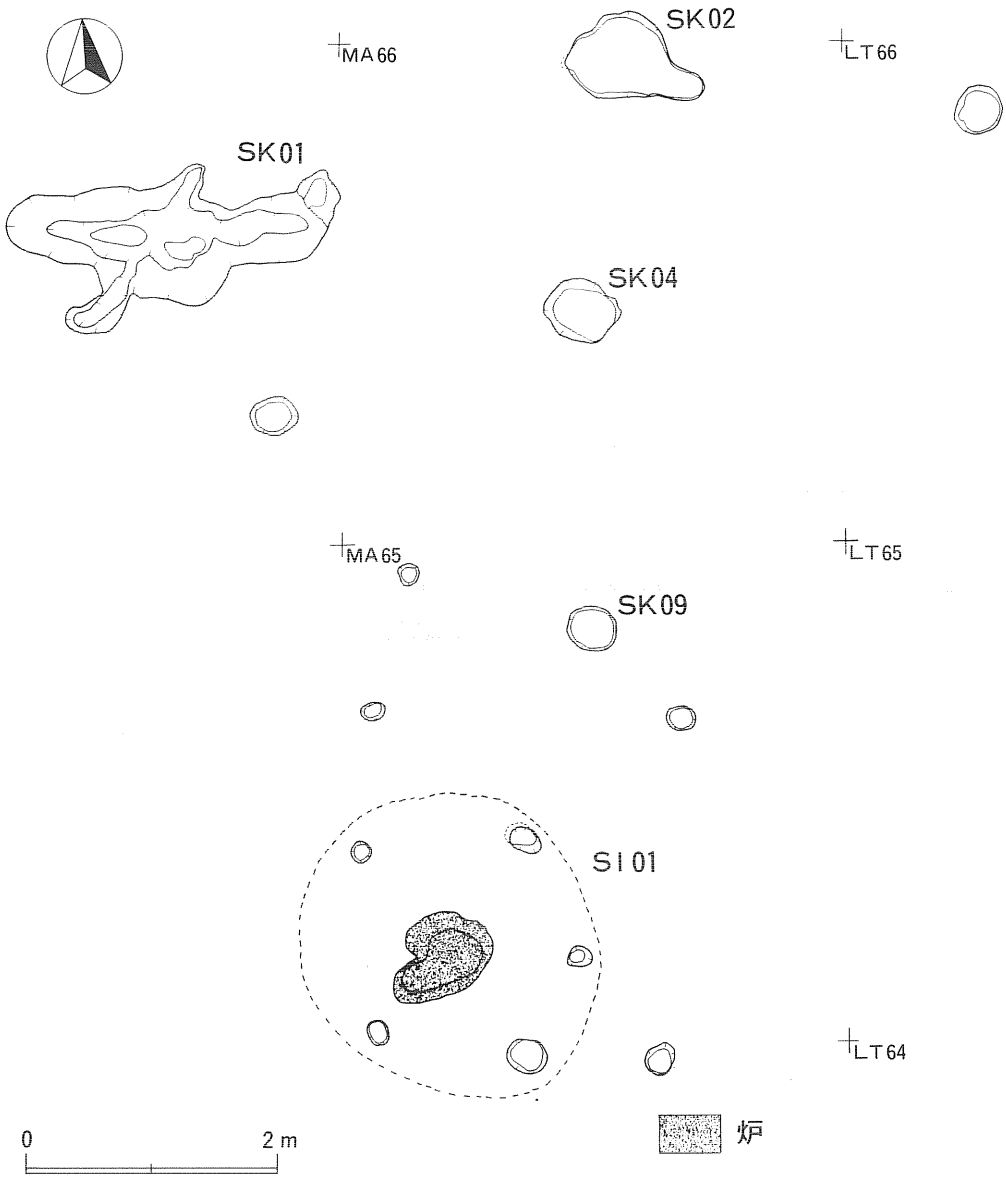
LT63・64、MA64のグリッドに検出された。検出地点は調査区の中で比較的標高が高い場所で、確認面で86.5mを測る。15～20cmの耕作土を除去した地山面で柱穴プランを確認した。５本の柱穴に囲まれたほぼ中央部に焼けて焼土化した面が観察されたため、本遺構が竪穴住居跡であることが推定された。壁はすでに失われていたことから、耕作が地山まで及んでいたことが窺われる。平面形は楕円形と推測され、推定の長軸が２m52cm、短軸が２m29cmである。床面には、踏み固められた痕跡がなかった。また、壁溝も観察されなかった。検出時の炉の状況は、床面が焼けて赤変していた程度で、焼土が堆積しているほどでなかった。エレベーションでみると、炉の部分がくぼんでいるが、これは大部分掘りすぎによるものである。遺物は出土しなかったが、縄文土器を出土した土坑(SK02・04・09)が北側に位置することから、当時期のものと推定される。なお図の５本の柱穴に付された数字は、確認面からの深さを表す。

②土坑

SK02土坑（第８・９・10図、図版８）

LT65・66グリッド地山面でプランを確認した。確認面での標高は、86.5mを測る。本土坑の南約２mにSK04土坑が位置する。平面形は不整形で、東西方向が１m６cm、南北方向が69cmである。確認面からの深さは、15cmを測る。埋土には、焼土粒、炭化物を含む。

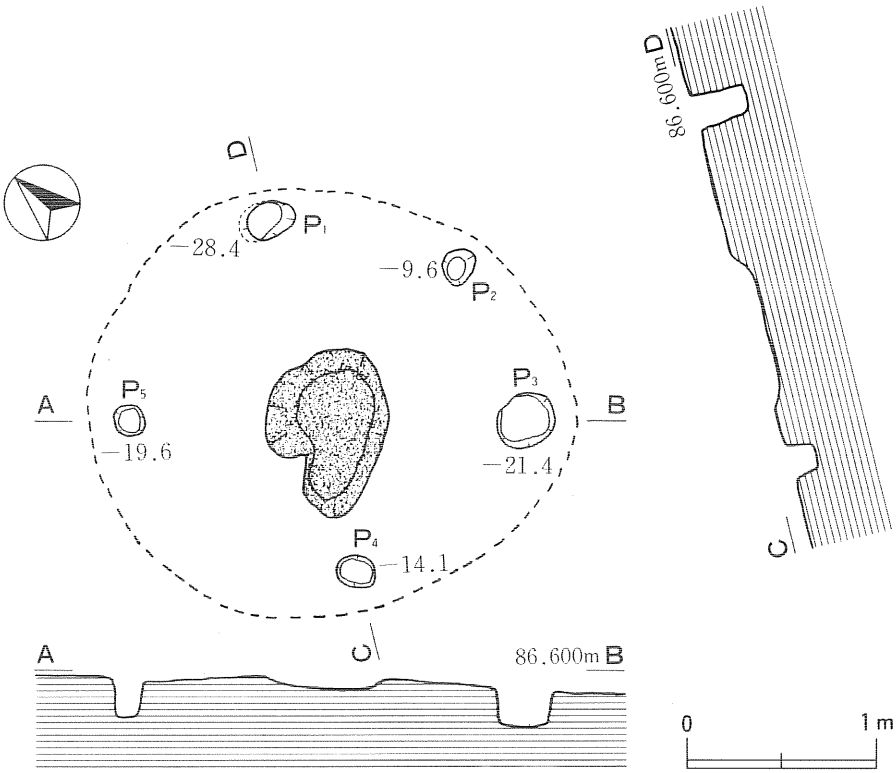
遺物は、土器片とフレークが出土した。土器片はいずれも非常に脆く、二次的な加熱を受けたものと推定される。胎土に砂粒と長石を含む。５は、口縁部資料で、地文にRL縄文を施した後竹管による刺突文が見られる。３，８，14,15,20～22,24,26,は、半截竹管による沈線文が施される。23は、RL縄文の地文のみが施される。27のフレークは、剥離面に被熱による剥落が観察される。



第６図　遺構集中地区配置図

SK04土坑（第８・10図、図版３・７）

LT65グリッド地山面でプランを確認した。確認面での標高は、86.6mを測る。平面形は楕円形を呈し、長軸56cm、短軸50cm、確認面からの深さは19cmである。土層観察用のベルトを設定する前に、大部分掘られてしまって堆積状況を図示できなかったが、ボソボソしており、移植ごてをあてると小さな塊となってとれてくるといった土である。色調は、黒褐色(10YR3/2)を



第７図　ＳＩ01竪穴住居跡実測図

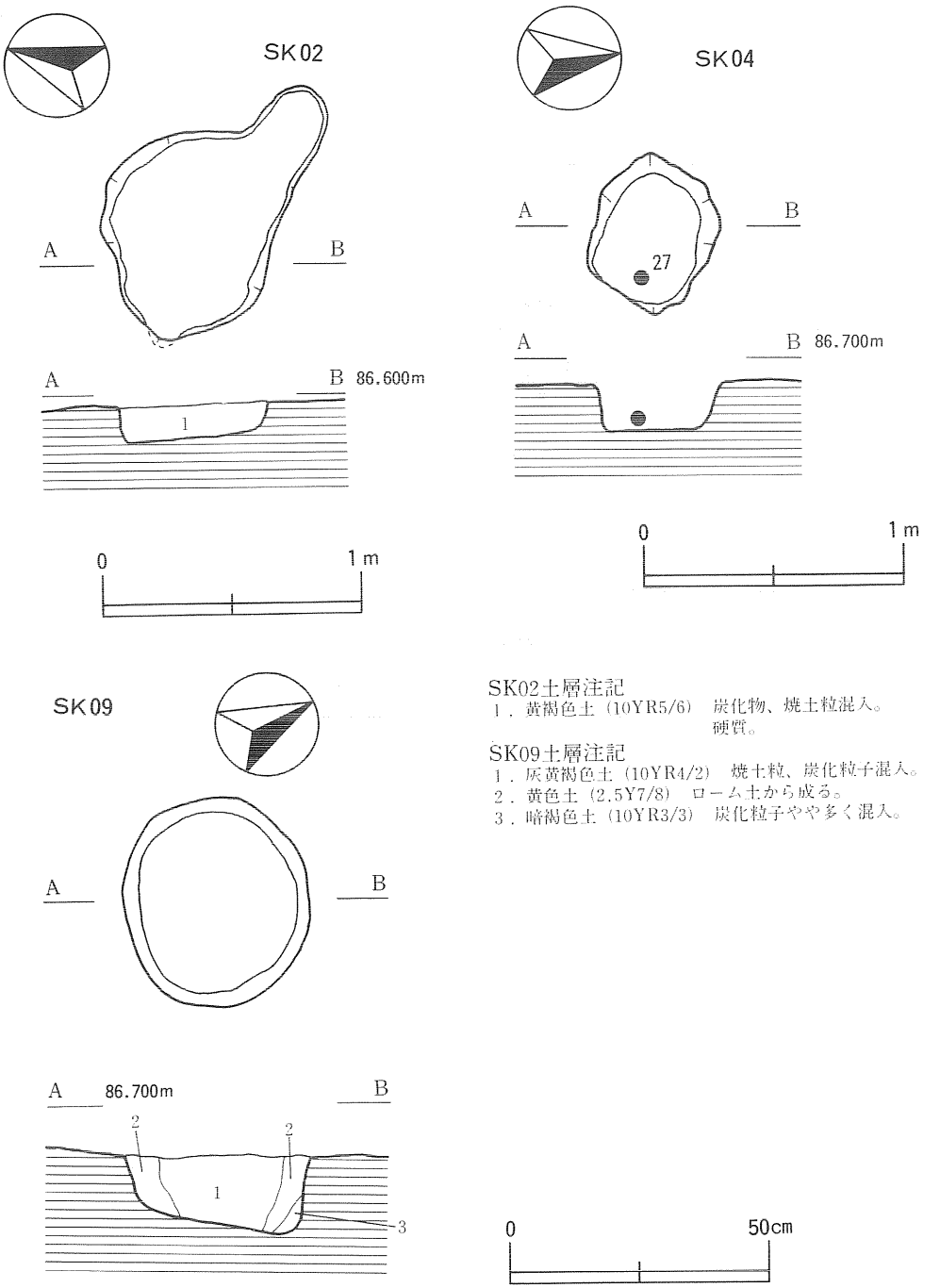
呈する。

遺物は、小型の壷形土器が東側の壁際に横位で出土した。半截竹管により沈線文が施文されている。

SK09土坑（第８・10図、図版９）

LT64グリッド地山面でプランを確認した。確認面の標高は、86.6mを測る。本土坑の南側約３mにSI01竪穴住居跡が、北側約2.5mにSK04土坑が位置する。平面形は、楕円形を呈し、長軸42cm、短軸36cmである。確認面からの深さは、10～15cmである。埋土には、焼土粒、炭化物が含まれる。

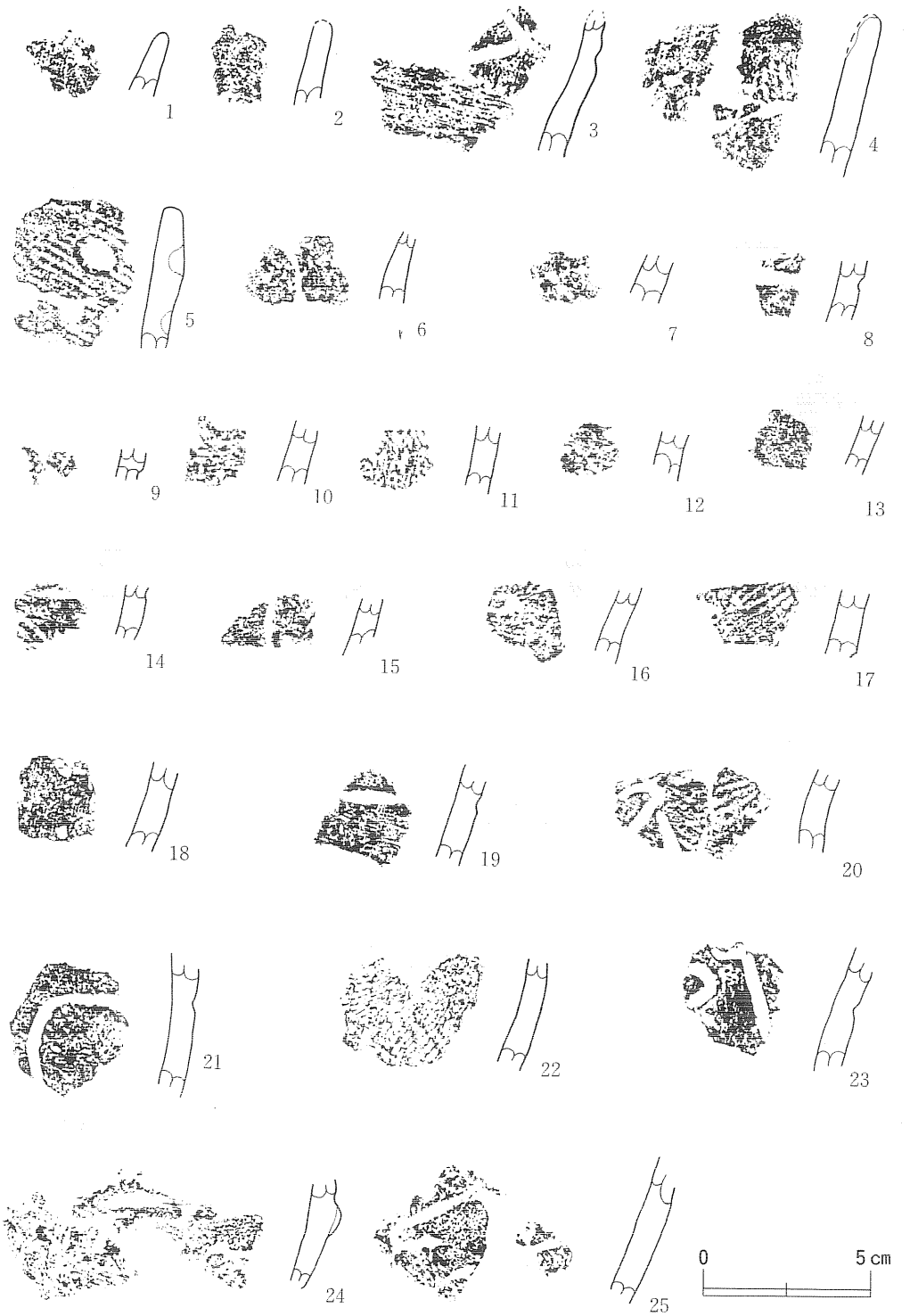
埋土中から土器片が出土した。２個体あると思われるが、表面の磨滅が著しく、文様がほとんどわからないものばかりだった。拓本を取ってみて、LRとRLの２つの縄文があることが明らかになった。いずれも胎土に砂粒と長石を含んでいる。29は、口縁部資料で、表面に煤が付着している。42は、底部付近の破片であるが、外面のつくりがやや雑である。32,38にはRL縄文が、41にはLR縄文が施されている。



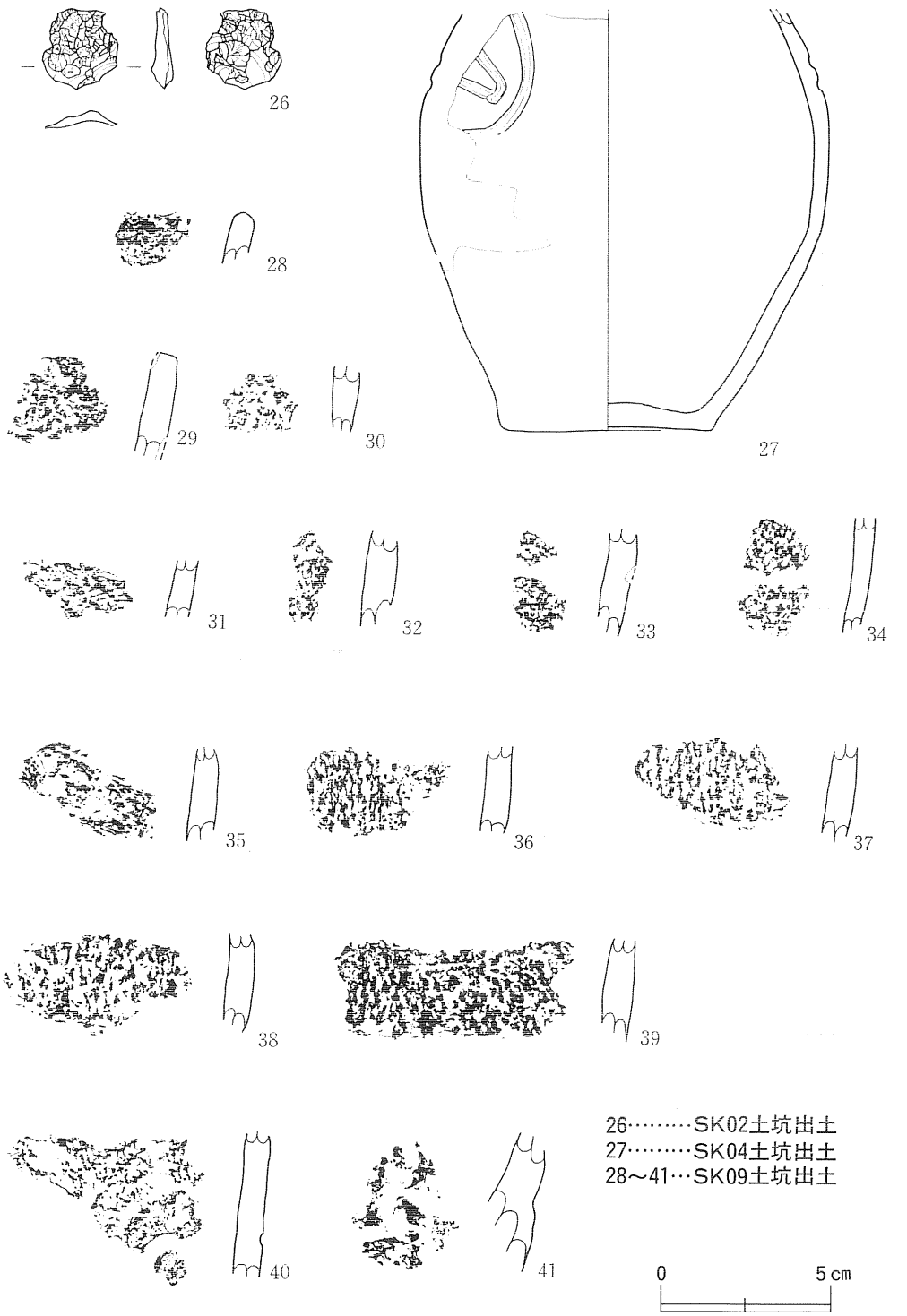
SK02土層注記
1．黄褐色土（10YR5/6）　炭化物、焼土粒混入。硬質。

SK09土層注記
1．灰黄褐色土（10YR4/2）　焼土粒、炭化粒子混入。
2．黄色土（2.5Y7/8）　ローム土から成る。
3．暗褐色土（10YR3/3）　炭化粒子やや多く混入。

第８図　SK02・SK04・SK09土坑実測図



第９図　SK02土坑出土遺物



第10図　SK02・SK04・SK09土坑出土遺物

③陥し穴

SKT01陥し穴（第11図、図版４）

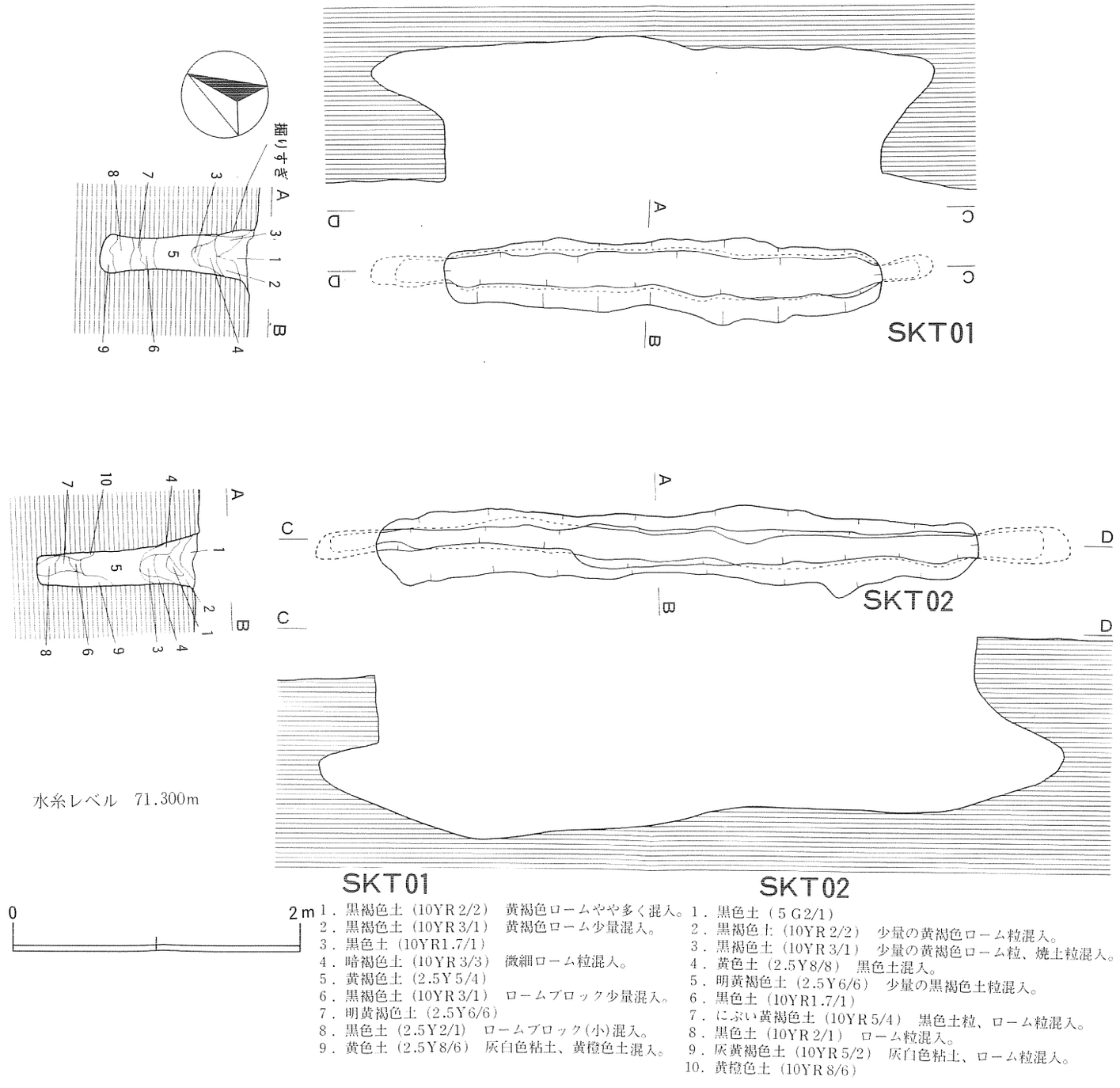
MS77・78グリッド地山面でプランを確認した。確認面の標高は、約71.2mである。本遺構の西側約1.5mにはSKT02陥し穴がほぼ平行して位置する。平面形は、開口部、坑底部ともに南北に細長い楕円形で、長軸方向はＮ－29°－Ｗである。長軸方向の断面は、両端が外側に広がるもので、底面中央部が両端よりも深く掘り込まれている。短軸方向の断面は、開口部から若干広がったあと坑底部までほぼ垂直に下がるＹ字形のものである。大きさは、開口部の長軸が約３m、短軸が約0.4m、坑底部の長軸が約3.9m、短軸が約0.3m、深さが約1～1.5mである。埋土は９層に分層された。全体的にローム粒子が混入しており、最下層には灰白色粘土が確認された。

遺物は出土しなかった。

SKT02陥し穴（第11図、図版４）

MR77、MS77・78グリッドの地山面で確認された。確認面の標高は約71.2mである。本遺構の東側約1.5ｍにはSKT01陥し穴がほぼ平行して存在する。平面プラン、断面形ともSKT01陥し穴とほとんど同一形態をとる。長軸方向はN－28°－Wである。大きさは、SKT01陥し穴より若干大きくなり、開口部の長軸が約4.15ｍ、短軸が約0.45ｍ、坑底部の長軸が約5.15ｍ、短軸が約0.2ｍ、深さが約1.25～1.45ｍである。埋土は10層に分層され、全体的にローム粒子が混入している。第９層には灰白色粘土が確認された。

遺物は出土しなかった。

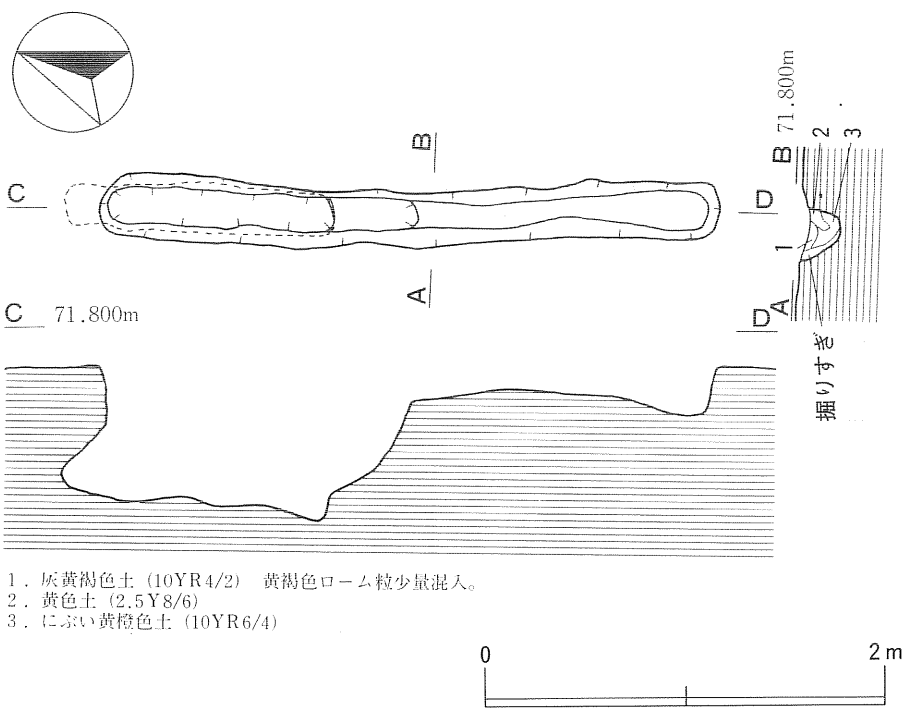


第11図　SKT01・SKT02陥し穴実測図

SKT03陥し穴（第12図、図版５）

NC71・72グリッドの地山面でプランを確認した。確認面の標高は約71.6mである。SKT01.02陥し穴と同じく北側テラス部分に位置する。平面プランは開口部、坑底部とも南北に細長い楕円形を呈する。長軸方向はN―21°―Wである。長軸方向の断面から、坑底部は北端から約1.3ｍの部分だけが深く掘り込まれており、中央部からは浅くなっている。深い部分の長軸は約1.3m、短軸は0.25mである。開口部の長軸は約3.1m、短軸は約0.3mを測る。短軸方向の断面形は、浅い部分でＵ字形を示す。深さは20～80cmである。埋土は浅い部分で３層に分層された。

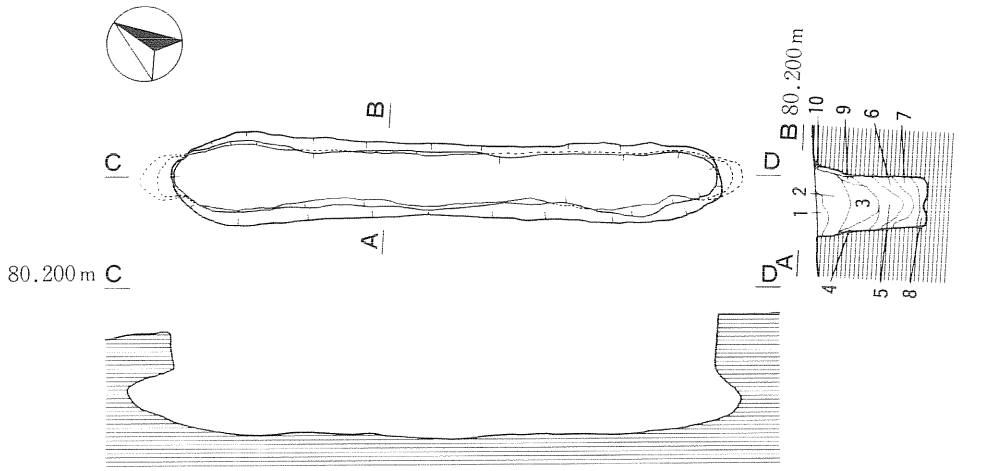
遺物は出土しなかった。



第12図　SKT03陥し穴実測図

SKT04陥し穴（第13図、図版４）

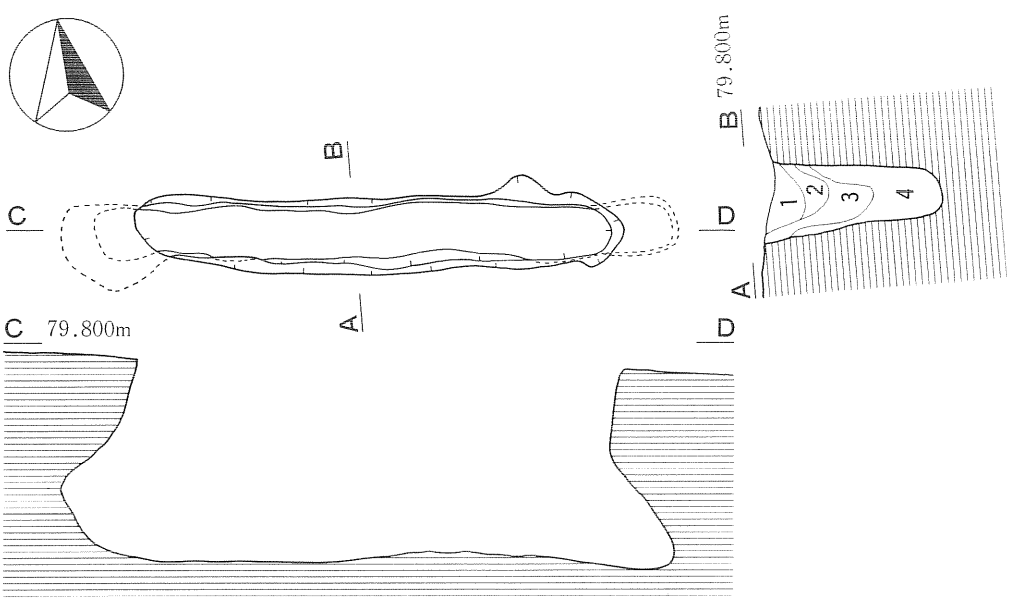
MM55・56、MN55グリッドの地山面で確認された。確認面の標高は約80.2mである。北側にはSD02空堀が位置する。平面形は、開口部、坑底部ともに細長い楕円形を呈す。長軸方向は、N―36°―Wである。長軸の断面形態は、両端が外側に広がるもので、底面中央部が両端部よりも深く掘り込まれている。短軸の断面形態は開口部からややすぼまり、掘り込み面からほぼ垂直に下がるいわゆるＵ字形のものである。規模は、開口部の長軸が約4.35m、短軸が約0.6m、坑



1．暗褐色土（10YR 3/3）
2．褐色土（10YR 4/4）　ローム粒子少量混入。
3．黒褐色土（10YR 2/2）ローム粒子、炭化物少量混入。
4．黄橙色土（10YR 7/8）ローム土、緻密。
5．にぶい黄色土（2.5YR 6/4）　黒色土粒やや多量に混入。
6．浅黄橙色土（10YR 8/4）
7．黄色土（2.5YR 8/6）　白色粘土粒混入。ボソボソしている。
8．淡黄橙色土（2.5YR 8/4）　黒色土粘、白色粘土粒混入。粘性弱い。
9．にぶい黄橙色土（10YR 5/3）
10．明黄褐色土（10YR 6/6）　やや硬質。

0　2m

第13図　SKT04陥し穴実測図



1．にぶい黄褐色土（10YR 4/3）　炭化物少量混入。
2．黒褐色土（10YR 3/2）　ローム粒(中)少量混入。炭化物も含む。
3．黄褐色土（10YR 5/8）　硬質。

0　2m

第14図　SKT05陥し穴実測図

底部の長軸が約4.6m、短軸が約0.4m、深さが約１mを測る。埋土は10層に分層された。上層部にローム粒子が目立つ他、第７、８層に白色粘土の混入がみられる。

遺物は出土しなかった。

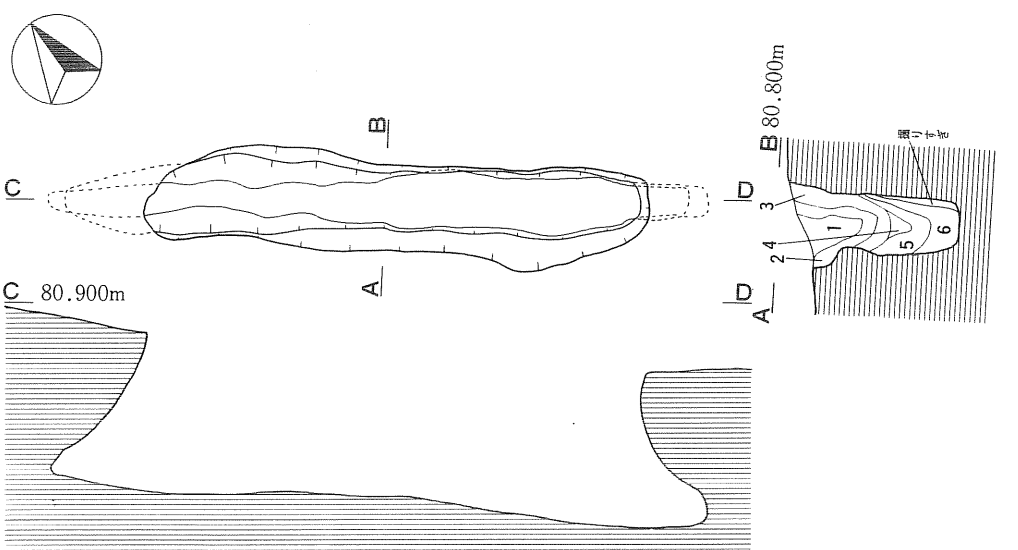
SKT05陥し穴（第14図）

MQ56グリッドの地山面で確認された。確認面の標高は約79.8mである。東側にSD02空堀が位置する。平面形は東西に細長い楕円形を呈する。長軸方向は、N－80°－Wである。長軸の断面形態は、やや内側に掘り込まれた後外側に広がるもので、西端部よりも東端部のほうが深く掘り込まれている。短軸の断面形態は、開口部からややすぼまりながら坑底部に達する、いわゆるU字形のものである。規模は、開口部の長軸が約2.5m、短軸が約0.4m、坑底部の長軸が約3m、短軸が約0.25m、深さが約１mである。埋土は４層に分層された。

遺物は出土しなかった。

SKT06陥し穴（第15図）

MK61グリッドの地山面で確認された。確認面の標高は約80.8mである。本遺構はSD02空堀の底面で検出されている。平面形は東西に細長い楕円形である。長軸方向は、N－54°－Wである。長軸の断面形態は、両端が外側に広がっており底面中央部が両端よりも若干高くなっている。



1．黒色土（10YR1.7/1）　ローム粒少量混入。
2．黒褐色土（10YR3/2）
3．暗褐色土（10YR3/3）　２層よりローム粒の混入多い。
4．にぶい黄褐色土（10YR5/4）
5．明黄褐色土（10YR6/8）　黒色土粒少量混入。
6．黄橙色土（10YR7/8）　硬質。

0　2m

第15図　SKT06陥し穴実測図

短軸の断面形態は、左右不均整で、右側はややすぼまったあと坑底部まで垂直に下がり、左側は一旦大きくすぼまってから外側に広がったあと坑底部まで少しずつすぼまるという形態である。規模は、開口部の長軸が約3.5m、短軸が約0.55m、坑底部の長軸が約4.15m、短軸が約0.3m、深さが約１mである。埋土は６層に分層された。

遺物は出土しなかった。

２．中　　世

中世と思われる遺構・遺物は皆無に近く、空堀１条のみが検出された。

SD02空堀（第16図、図版５、６）

調査区のほぼ中央部を横断するように北東から南西に尾根が入っているが、その尾根の南側に平行するように本遺構が位置する。調査前の状況では、遺構部分だけが一段低くなっており、その存在は容易に確認することができた。しかし、本遺構の一部は調査区外に伸びており、またトレンチを主体とした調査に終始したため全体を調査することができなかった。多少不十分なデータではあるが、本遺構の特徴は把握することができたものと思われる。調査区にかかっている部分の長さが約91m、幅が10～13.5m。確認面からの深さが、40cm～２m10cmを測る。東から西に縦断するエレベーションをみると、標高約86.2mから徐々に下り、MM58グリッドで標高約78.4mと最も低くなり、約7.8mの比高差を有する。そこから西に行くにしたがって徐々に上り、MR55グリッドで標高約80.7mを測る。東端と西端とでは、約5.5mの比高差を有する。横断面でみると、北側壁の立ち上がりは緩やかな反面、南側壁はかなり急角度でもって立ち上がっており、一部はハングしている箇所も観察された。埋土は、上部の30～80cmは耕作による攪乱を受けている。その下部は、黒色系の土と黄褐色系の土が自然堆積しているのが観察された。

遺物は、出土しなかった。

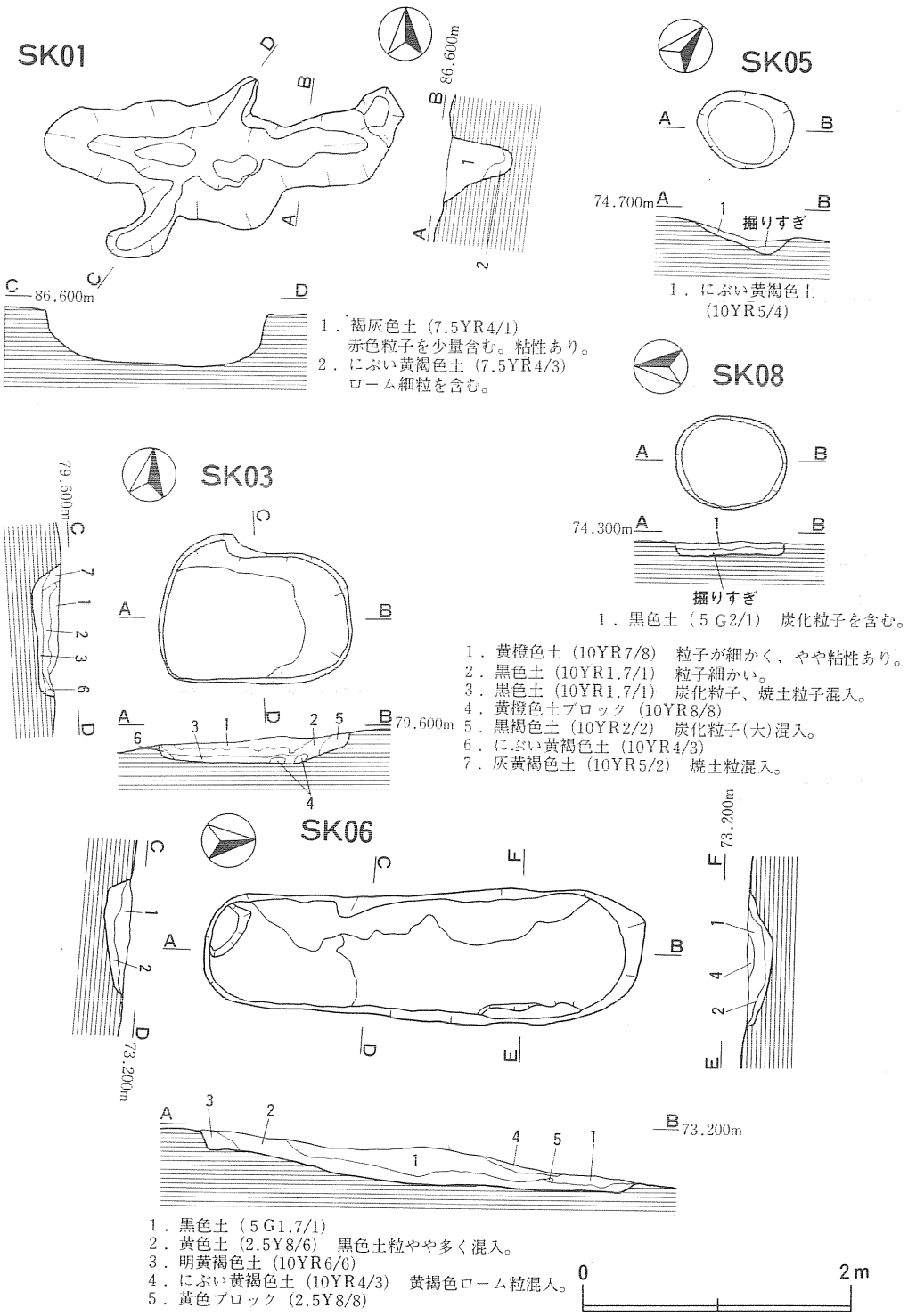
３．時期不明遺構

遺構中から時期を決定できるような遺物が出土しなかったものとしては、土坑５基、溝状遺構１条があげられる。

SK01土坑（第17図）

MA65グリッド地山面でプランを確認した。確認面での標高は、86.5mである。本土坑の約３m東にSK04土坑が位置する。平面形は不整形を呈し、東西方向で２m60cm、南北方向で１m39cm、深さは18～48cmである。やや粘性を帯びた埋土が入っていた。

遺物は出土しなかった。



第16図　SK01・03・05・06・08土坑実測図

SK03土坑（第17図、図版７）

MG47・48グリッド地山面でプランを確認した。地形上では、平坦部の南側縁辺の緩斜面に位置する。プラン確認面での標高は、79.5mである。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸１m42cm、短軸１mである。北西側の壁は、やや掘りすぎている。深さは、９～21cmを測る。検出時の埋土の状況は、中心部に熱を受けた地山土があり、そのまわりに炭化物を多量に含む黒色土、さらに壁際に焼土が観察された。底面は平坦であるが、北側および東側は緩く立ち上がったあと、ほぼ垂直に立ち上がる壁に達する。この緩い立ち上がりは、特に東側で顕著である。

遺物は、出土しなかった。

SK05土坑（第17図）

MF47グリッド地山面でプランを確認した。確認面での標高は、79.6mである。平坦部の南縁にあり、本土坑の西約3.4ｍにSK03土坑が位置する。平面形は、楕円形を呈する。大きさは、長軸73cm、短軸58cmで、深さは、４～14cmである。

遺物は、出土しなかった。

SK06土坑（第17図）

MQ74・75グリッド地山面でプランを確認した。確認面での標高は、73.1mである。平面形は隅丸方形で、東側の辺が３m25cm、南側が84cm、西側が３m27cm、北側が１m13cmである。確認面からの深さは、６～27cmである。坑底は平坦でなく、東から西へ緩く傾斜している。

遺物は出土しなかった。

SK08土坑（第17図）

MO73グリッド地山面でプランを確認した。確認面での標高は、74.2mである。平面形は楕円形を呈し、長軸が84cm、短軸が70cmで、深さが６cmである。埋土には、炭化物が含まれる。

遺物は出土しなかった。

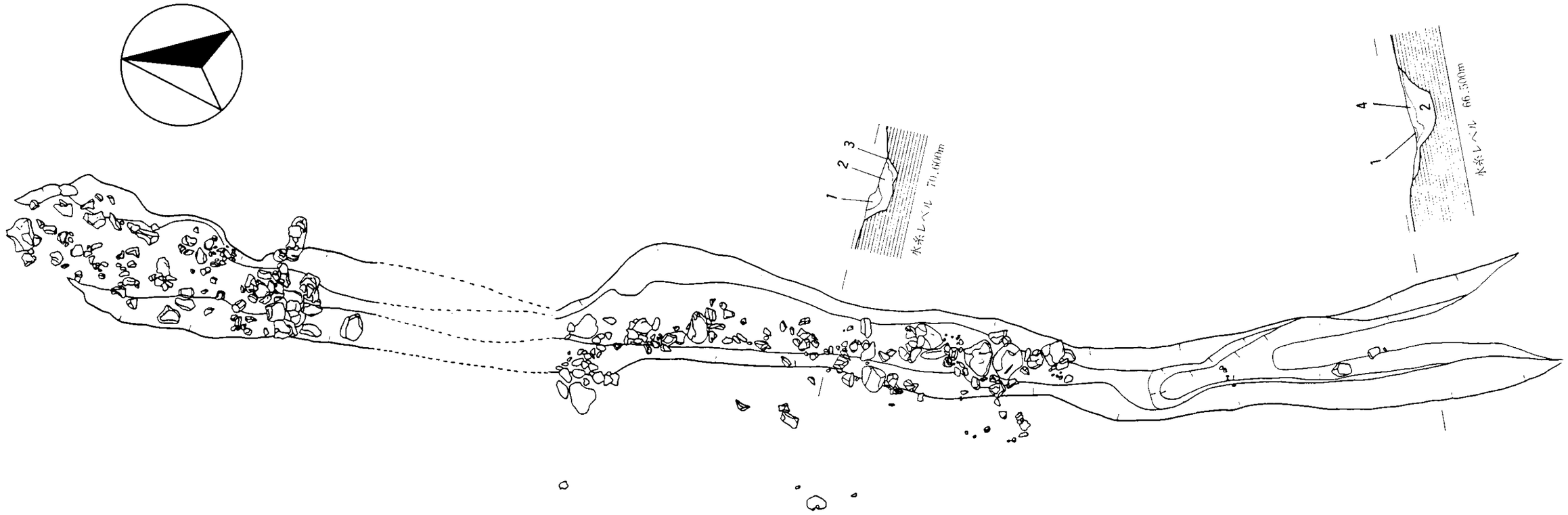
SD01溝状遺構（第18図）

調査区南側斜面に位置し、LN54グリッドからLN44グリッドにかけて地山面で確認した。標高は、LN51グリッド地表面で約78.4m、LN44グリッド地表面で67.4mで、約11mの比高差を有する。全長が32m、幅が１m10cm～２m40cmを測る。確認面からの深さは、40～50cmで、断面形は逆台形を呈する。埋土中から自然礫がやや集中して出土した程度で、遺物は見つからなかった。

第２節　遺構外出土遺物（第19・20図、図版９・10）

遺構外の遺物としては、土器・土製品７点、石器７点、金属製品１点が出土した。

43,44,45,は縄文土器であるが、表面がかなり磨滅していて文様が不明なものがあった。43

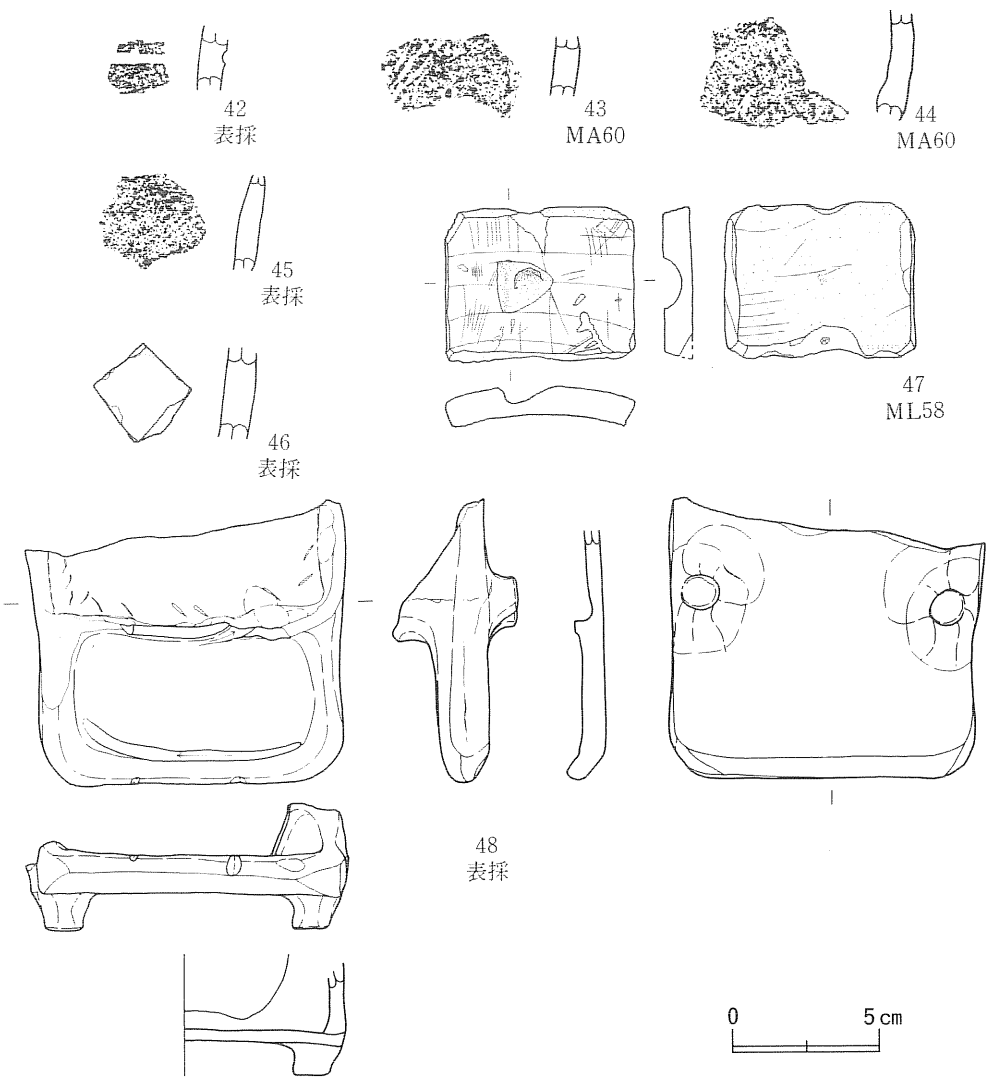


1．黒褐色土（10YR3/2）　少量の炭化物混入。軟質。
2．黒褐色土（10YR2/2）　少量の炭化物混入。
3．暗褐色土（10YR3/4）　地山土粒が混入。
4．暗褐色土（10YR3/3）　固くしまっている。

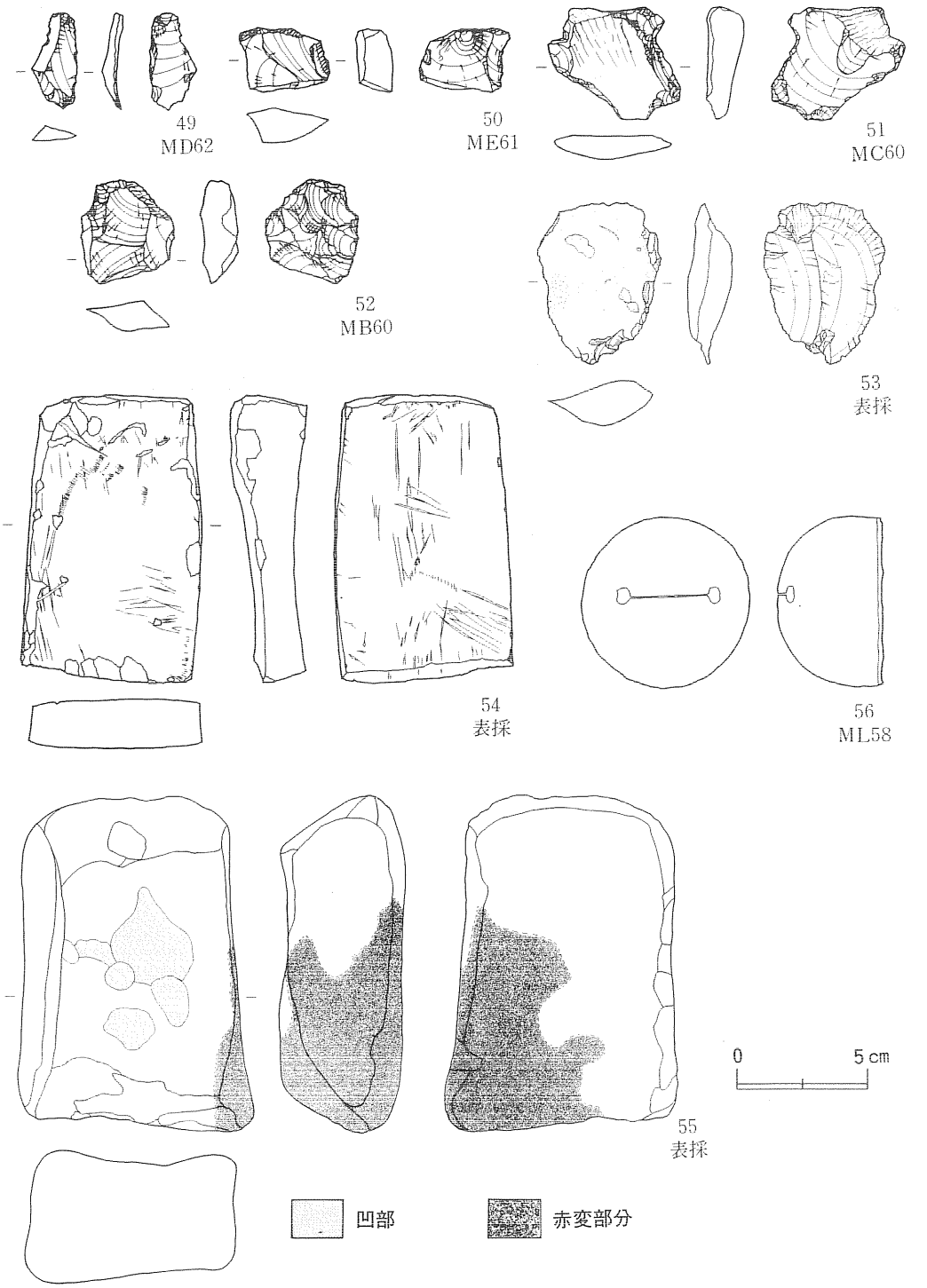
0　6m

第17図　SD01溝状遺構実測図

は胎土に砂・長石を含み、半截竹管による沈線文が施されている。44,45は、同一個体と思われ、LR縄文が施されている。胎土には砂粒と長石が含まれている。47は、七輪の空気取り入れ口の窓と思われる。48は、キャフロの一部である。49～53は剝片であるが、51～53は自然面を残している。54は砥石で、中央部の薄くなったところで折損している。各面とも良く使い込まれている。55の凹石は、火を受けて赤変している部分が観察される。56は、真鍮製の鈴である。



第18図　遺構外出土遺物(1)



第19図　遺構外出土遺物(2)

第5章　ま　と　め

ここでは、本遺跡で検出された縄文時代の陥し穴と中世における本遺跡の性格について述べてみたい。

陥し穴遺構について（第2表）

近来、秋田県内の遺跡で陥し穴遺構を検出する例が増えてきている。これらについては、第2表にまとめた。分類は、田村壮一氏による、A型:溝状を呈し細長い形状を示すもの、B型:楕円形若しくは長方形を呈するもの、C型:円形か方形を基調としたもの(註1)、に従った。表から、A型が圧倒的多数を占めていることがうかがえる。

本遺跡では、全部で6基の陥し穴遺構を検出した。いずれもA型で溝状を呈するものであった。低山地上の平坦面に3基、北側斜面テラス部分に3基がそれぞれ位置する。規模は、開口部が2.6～4.35m(長軸)X0.3～0.6m(短軸)、坑底部が3～5.15m(長軸)X0.2～0.95m(短軸)、深さが1～1.45mである。断面形は、長軸方向は両端が外側に広がり、坑底部が開口部よりも長い袋状を呈し、短軸方向は「U」字形あるいは不整の「U」字形を呈している。埋土の特徴としては、全体的にローム粒子あるいはロームブロックを混入しているが、これは遺構が埋没する過程で壁が崩落したものと思われる。主軸方向は、磁北に対して西に偏っているもの(01,02,03,05,06)と、東に偏っているもの(04)に分けられる。

このような形態をした遺構について、従来は「陥し穴」説の他に、「墓坑」説、「便所」説、「馬関係遺構」説が唱えられてきたが、横浜市霧ケ丘遺跡(註2)の発掘調査以来「陥し穴」説が定説となり現在に至っている。本遺跡においてもTピット＝陥し穴説に従って、これらについて見ていきたい。

遺構が構築、廃絶した時期を推定する手掛かりとなるものとして、出土遺物、火山灰との層位関係、他遺構との切り合い関係などがあげられるが、本遺跡の陥し穴からはいずれも認められなかった。

配列状態、埋土の堆積状態から2基をセットとして把握可能なものは、01と02である。北側テラス部分に約1.5m間隔で並列しているうえ、等高線に対して平行であることから、いわゆる「ケモノ道」との関係を連想させる。「ケモノ道」と陥し穴の関係について、青森県牛ケ沢（3）遺跡(註3)では、溝状ピットの長軸方向がケモノ道の方向に平行するように配置されたと想定されている。シカ道やイノシシ道は平坦部が丘に移行する斜面の下端や台地の縁辺を通ることが多い。これらのことから、テラス部分が「ケモノ道」であったと仮定することが可能である。

構築方法を示すものとして03があげられる。長軸方向の断面が右と左で段差がついているものである。青森県沖附(２)遺跡[註4]で「未完成の溝状ピット」の可能性のあるものとして報告されている例は、両側を同時に掘り下げて完成する過程を示している。本遺構の場合、①両側をある程度掘り下げたあと片側ずつ掘り切る、②片側だけを掘り切ってから残りを掘る、③この形で完成の状態、の３つの可能性が考えられる。本遺跡における他の陥し穴の例から見て③は削除されるであろう。溝状ピットの形態が細長く深いという物理的に非常に掘りにくいという点から考えにくい。本遺構の場合、①の途中で構築作業が放棄されたものと解釈したい。

調査区から検出された溝状ピットのうち、なんらかの可能性が推定できるものは、以上の３基であった。遺構の性格上、構築、廃絶年代を確定する手掛かりに乏しいため、今回の調査では埋土の土壌分析の必要性を痛感させられた。

中世における石神遺跡について（第21図）

石神遺跡は、地形及び空堀の存在から中世の城館のひとつとされている。調査の結果、空堀のほかに中世に属すると思われる遺構及び遺物が皆無という状況であった。ここでは、以下の諸点から遺跡の性格に迫ってみたいと考える。すなわち、(a)歴史的環境、(b)地理的環境、(c)地元に残る伝承、(d)調査で得られた知見の４点である。

(a)歴史的環境

大曲市と南外村を分ける低山地上には、本遺跡のほか六郎沢館、大向館、薬師堂館など中世の城館が分布している。大向館と薬師堂館は大曲市から本荘市へ抜ける道をはさむように位置している。一方、その道沿いにある中山集落から分かれて楢岡に抜ける道と小出川をはさむように六郎沢館と本遺跡が位置している。直線距離にして１kmである。六郎沢館は、標高120mほどの山の上にあり、30m×23mの主郭とそれを取り囲むように土塁と帯郭が配され、北側に空堀を有する。大曲方面からの敵の侵入を警戒するか、くい止める役目をもっていたと推定されている[註5]。また、本遺跡の南約200mの小山に神社が祭られている。これには観音様が祭られ、毎年４月23日に祭礼が行なわれるという。神社の石燈籠には、文政13(1830)年という文字が彫られている。今回発掘調査した部分は、昭和20年前後に開墾が行なわれている。

(b)地理的環境

南南東から北北東に蛇行して流れる小出川と、東北東から西南西に向かって流れ小出川と合流する中山深山沢とによって開析され、半島状に水田に突き出ている低山地の上に本遺跡は立地する。その山の裾をまわるように市道大畑線が通っている。遺跡からは、南の中山方面、西の六郎沢館、北の楢岡方面への眺望がたいへん良い。また、中山深山沢は水量の豊富な清流であるため、生活用水のほか水田耕作に利用されている。このあたりの水田は、いわゆる谷津田

であるため水稲の収量はやや落ちるものの、きれいな沢水がおいしい米を作ると言われている。沢水は深山地区のほかに西村地区にも引かれており、小出川の水の利用度は低い傾向にある。

(c)地元に残る伝承

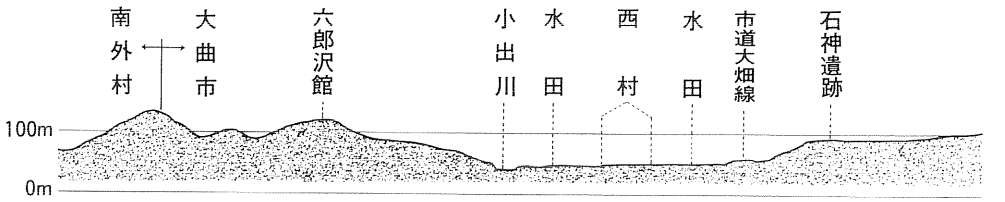
本遺跡の立地する山を、地元の人は「館の山」と呼びならわしており、水田をめぐって小出川の向こうの山(六郎沢館と推定される)との間で争いがあったこと。また、「館の山」側で楢岡方面に行く場合に、小出川沿いの道を通ると六郎沢館のほうに知られてしまうので、逆に深山沢のほうの山道を利用したという伝承を聞くことができた。

(d)調査で得られた知見

今回の調査で中世城館に関係する遺構と考えられたものは、南側斜面に段々畑状に造成されたものと空堀である。前者は、斜面部に土を階段状に盛り上げて、5～6段の平坦面を作り出しているものであった。当初は郭でないかと推定されたが、戦後につくられた段々畑であることが判明した。後者の空堀は、東側から入っている小さい尾根の南側にそれと平行するように位置している。等高線とはほぼ直交する関係にある。台地の端から端を貫いてひとつの区画面をつくるといったものでなく、堀の西端はダラダラと立ち上がり、自然の地形に吸収されてしまっている。東側については、次第に浅くなっていっているのが観察され、調査区外で自然地形に吸収されてしまうものと推定される。しかし、そのさらに東側に尾根に沿って幅5～7mの空堀状の落ち込みが完全に埋まりきらずに続いているのが現地を歩いてみてわかった。断面観察は3箇所で行ったが、付図断面図からわかるように、自然営力による変形を受けている。すなわち、空堀の南側（右）の壁は崩落によってオーバーハングしており、北側（左）の壁は雨水等の侵食によって削られ、緩い傾斜で立ち上がる。このことは、空堀が等高線に直交してつくられ、かつ北側に尾根があるという地形の影響であろう。3箇所の断面図のうちC－Dの断面図をみると、他の断面より原形を比較的良くとどめていることがわかる。これによると、本来の断面形は逆台形を呈していたことが推測できる。

以上4点について述べてきたが、(a)～(c)については相互に関連を有し、本遺跡が館として最適の立地であり、水の豊富な水田をめぐり争い合ったということは容易にうなずけるものであろう。(d)からは、空堀が尾根側からの自然営力により変形を受けていること。さらに調査区外東側に空堀が断続しながら続いていることが明らかになった。

ここでは、以上の点をふまえて次のように考える。調査区は、石神遺跡の西の端にあたること。今回調査された空堀のさらに東側に空堀らしい落ち込みが観察されたことなどから、館の主郭部分は調査区の東側の尾根上にあるのではないかと推定される。これは第21図から明らかなように、標高120mにある六郎沢館から標高80mの本遺跡の西の端が手に取るように見えることからも、十分考えられるものと思われる。



第20図　石神遺跡・六郎沢館立地関係図　（1：5000）

（註1）田村壮一　「陥し穴状遺構の形態と時期について」　『紀要』　Ⅶ　㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1987（昭和62年）　P.25

（註2）霧ケ丘遺跡調査団　『霧ケ丘』　武蔵野美術大学考古学研究会　1973（昭和48年）

（註3）青森県教育委員会　『牛ケ沢(3)遺跡』　青森県文化財調査報告書第86集　1984（昭和59年）　P.215

（註4）青森県教育委員会　『沖附(2)遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書第101集　1986（昭和61年）　P.214

（註5）長山幹丸　『南外村の城と館』　南外村郷土史資料　1987（昭和62年）　P.47

参考文献

青森県教育委員会　『発茶沢』　青森県埋蔵文化財調査報告書第67集　1982（昭和57年）

青森県教育委員会　『石ノ窪(1)・石ノ窪(2)・古宮遺跡発掘調査報告書』　東北縦貫自動車道八戸線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅹ　青森県埋蔵文化財調査報告書第92集　1983（昭和58年）

八戸市教育委員会　『長七谷地遺跡発掘調査報告書 長七谷地2・7・8号遺跡』　八戸市埋蔵文化財調査報告書第8集　1982（昭和57年）

福田友之　「溝状ピット研究に関する覚書」『弘前大学考古学研究』　第1号　弘前大学考古学研究会　1981（昭和56年）

㈶岩手県埋蔵文化財センター　『雫石町　下平遺跡　高校西遺跡』　岩手県埋文センター文化財調査報告書第14集　1978（昭和53年）

㈶岩手県埋蔵文化財センター　『東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査報告書　安代町荒屋Ⅰ遺跡・荒屋Ⅱ遺跡・越戸Ⅱ遺跡』　岩手県埋文センター文化財調査報告書第21集

西本豊弘　「狩猟・漁撈の場と遺跡」　『季刊考古学』　第7号　雄山閣　1984（昭和59年）

今村啓璽　「陥し穴(おとし穴)」　『縄文文化の研究』　2　雄山閣　1983（昭和58年）

第２表　　秋田県内陥し穴検出遺跡一覧表

遺跡名	所在地	立　地	時　代	陥し穴検出基数			文　献
				A型	B型	C型	
北の林Ⅰ	鹿角市	丘陵地の緩斜面	縄 文・平 安	16	—	—	秋田県教育委員会：東北縦貫道報告書Ⅲ　県報文第89集　1981(昭和56年)
北の林Ⅱ	〃	舌状台地上	縄 文	21	—	—	〃　：　〃　Ⅳ　県報文第90集　〃（　〃　）
猿ケ平Ⅰ	〃	段丘上の緩斜面	縄 文・弥 生	1	—	—	〃　：　〃　Ⅴ　県報文第91集　1982(昭和57年)
柏 木 森	〃	丘陵地の緩斜面	縄 文～古 代	1	—	—	〃　：　〃　Ⅶ　県報文第105集　〃（　〃　）
中 の 崎	〃	舌状台地縁辺部	縄 文～平 安	1	—	—	〃　：　〃　Ⅶ　県報文第105集　〃（　〃　）
妻の神Ⅲ	〃	丘陵地の緩斜面	縄 文～中 世	13	—	—	〃　：　〃　Ⅸ　県報文第108集　1984(昭和59年)
下 乳 牛	〃	〃	縄 文・平 安	1	—	—	〃　：　〃　Ⅺ　県報文第119集　〃（　〃　）
案 内 Ⅵ	〃	〃	縄 文～平 安	1	—	—	〃　：田山・花輪線報告書　県報文第115集　〃（　〃　）
高市向館	〃	〃	平 安・中 世	2	—	—	鹿角市教育委員会：鹿角市文化財調査資料22　1982(昭和57年)
はりま館	小坂町	〃	縄 文～平 安	14	—	—	秋田県教育委員会：東北縦貫道報告書Ⅹ　県報文第109集　1984(昭和59年)
大 岱 Ⅰ	〃	〃	縄 文・弥 生	2	—	—	〃　：　〃　Ⅹ　県報文第109集　〃（　〃　）
白長根館Ⅰ	〃	河岸段丘縁辺部	縄 文・平 安	7	—	—	〃　：　〃　Ⅻ　県報文第120集　〃（　〃　）
鳶ケ長根Ⅳ	大館市	舌状台地上	縄 文・弥 生	1	—	—	〃　：103号バイパス報告書　県報文第84集　1981(昭和56年)
藤　株	鷹巣町	河岸段丘縁辺部	縄 文	2	—	—	秋田県教育委員会『藤株遺跡発掘調査報告書』　県報文第85集　1981(昭和56年)
土　井	八森町	〃	旧石器～中世	2	—	—	〃　『土井遺跡発掘調査報告書』　県報文第111集　1984(昭和59年)
中 田 面	峰浜村	〃	縄 文～中 世	5	—	—	〃　『中田面・重兵衛Ⅰ・Ⅱ・根洗場遺跡 』　県報文第74集　1980(昭和55年)
館の下Ⅰ	能代市	舌状台地上	旧石器・縄文	1	—	—	〃　『館下Ⅰ遺跡発掘調査報告書』　県報文第62集　1979(昭和54年)
腹鞍の沢	〃	河岸段丘縁辺部	縄 文・平 安	10	—	—	〃　『腹鞍の沢・桐木田・蒲沼遺跡概報』　県報文第94集　1982(昭和57年)
上ノ山Ⅱ	〃	平 坦 部	縄文・平安・中世	2	—	—	〃　『上ノ山Ⅱ遺跡第２次発掘調査報告書』県報文第137集　1986(昭和61年)
大 畑 台	男鹿市	段丘上の平坦部	縄 文	2	—	—	日本鉱業株式会社船川製油所『大畑台遺跡発掘調査報告書』　1979(昭和54年)
三 十 刈	〃	丘陵地の緩斜面	縄 文～平 安	2	—	2	秋田県教育委員会『三十刈Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書』　県報文第110集　1984(昭和59年)
下 堤 C	秋田市	台地上の平坦部	縄 文～平 安	1	—	—	秋田市教育委員会『秋田新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書』　1987(昭和62年)
〃 D	〃	〃	旧石器・縄文・古代	2	—	—	〃　1982(昭和57年)
湯ノ沢F	〃	〃	平 安	1	—	—	〃　『秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書』　1984(昭和59年)
松木台Ⅲ	河辺町	〃	旧石器・縄文・平安	15	—	—	秋田県教育委員会『東北横断道報告書Ⅰ』　県報文第150集　1988(昭和63年)
石坂台Ⅳ	河辺町	台地上の平坦部	縄 文	1	—	3	秋田県教育委員会『東北横断道報告書Ⅰ』　県報文第150集　1988(昭和63年
石坂台Ⅷ	〃	〃	縄文・弥生	1	—	—	〃　『　〃　Ⅰ』　〃　〃（　〃　）
上ノ山Ⅱ	協和町	段丘上の平坦部	縄 文	6	—	—	〃　『東北横断道報告書Ⅱ』　県報文第166集　〃（　〃　）
館　野	〃	〃	縄 文	1	—	—	〃　『　〃　Ⅱ』　〃　〃（　〃　）
下岩ノ沢	仁賀保町	〃	縄文・平安	1	—	—	仁賀保町教育委員会『下岩ノ沢遺跡発掘調査報告書』　1986(昭和61年)
福　田	能代市	台地上	縄文・平安	1	—	—	秋田県教育委員会『八竜能代道路報告書Ⅱ』　県報文第178集　1989(平成元年)
石　丁	〃	〃	縄 文	2	—	—	〃　『　〃　Ⅱ』　〃　〃（　〃　）
十 二 林	〃	台地平坦部、緩斜面	縄文～平安・近世	8	—	—	〃　『　〃　Ⅱ』　〃　〃（　〃　）
半　仙	協和町	丘陵地の緩斜面	縄文・弥生	3	—	5	〃　『東北横断道報告書Ⅲ』　県報文第180集　1989(平成元年)
太田谷地館	鹿角市	台地平坦部	縄文～平安	—	—	3	〃　『西山農免農道報告書Ⅴ』　県報文第183集　1989(平成元年)

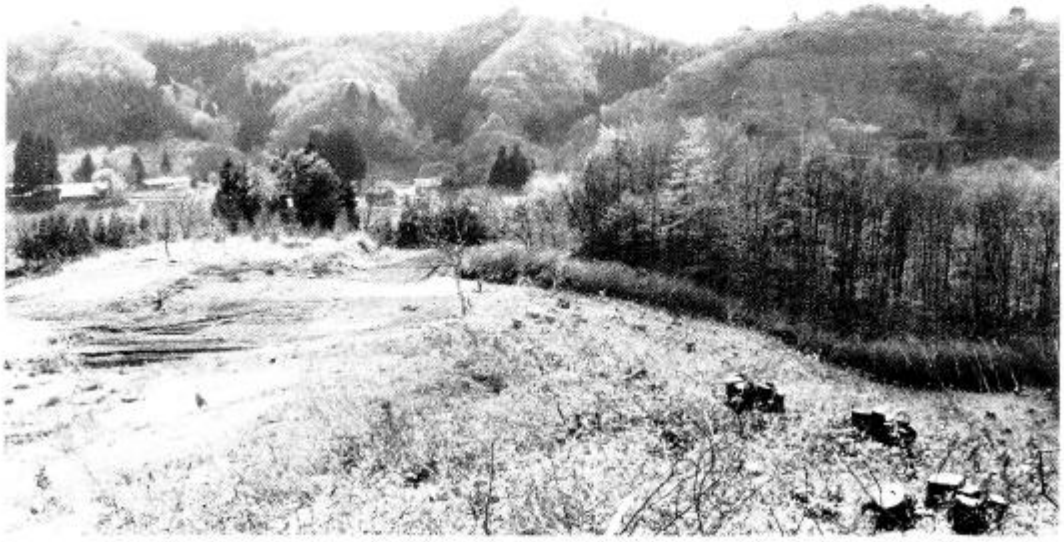
文献の項の正式名称は、次のとおりである。

東北縦貫道報告書	⇨	東北縦貫自動車道発掘調査報告書
田山・花輪線報告書		県道田山・花輪線関係遺跡発掘調査報告書
中田面・重兵衛Ⅰ・Ⅱ・根洗場遺跡		中田面遺跡・重兵衛Ⅰ・Ⅱ遺跡・根洗場遺跡発掘調査報告書
103号バイパス報告書		国道103号線バイパス工事関係遺跡発掘調査報告書
腹鞍の沢・桐木田・蒲沼遺跡概報		腹鞍の沢遺跡・桐木田遺跡・蒲沼遺跡発掘調査概報
東北横断道報告書		東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書
八竜能代道路報告書		一般国道７号八竜能代道路埋蔵文化財発掘調査報告書
西山農免農道報告書		西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

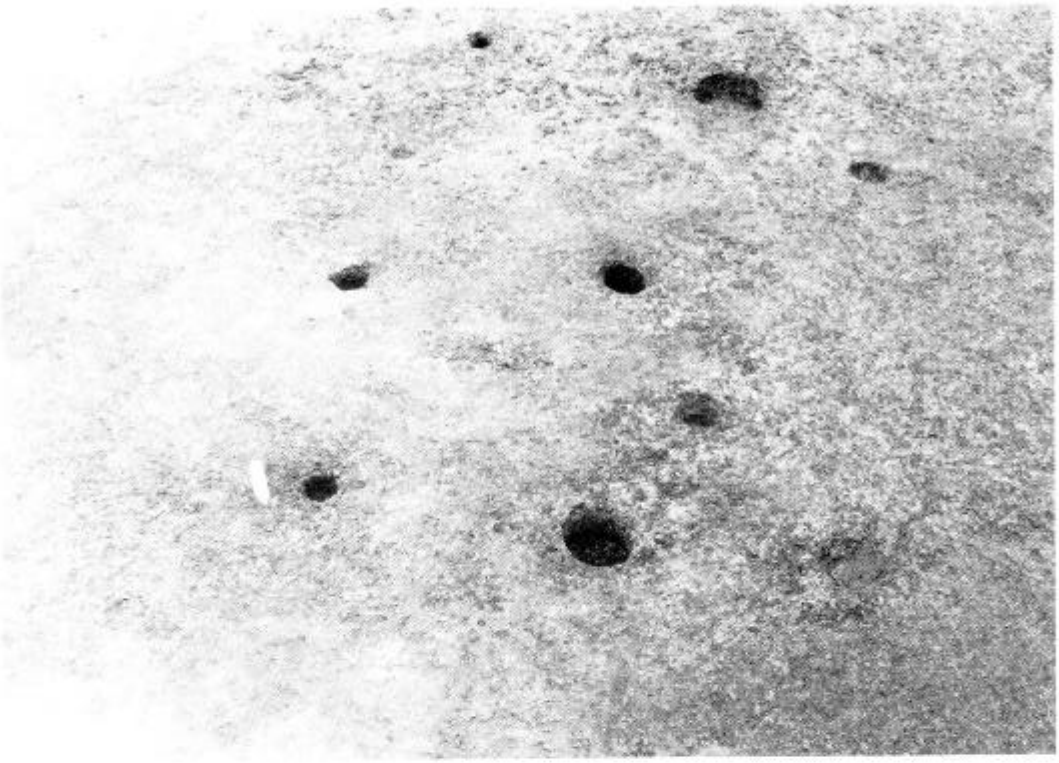
1　遺跡遠景(1)　(西→東)

2　遺跡遠景(2)　(西→東)

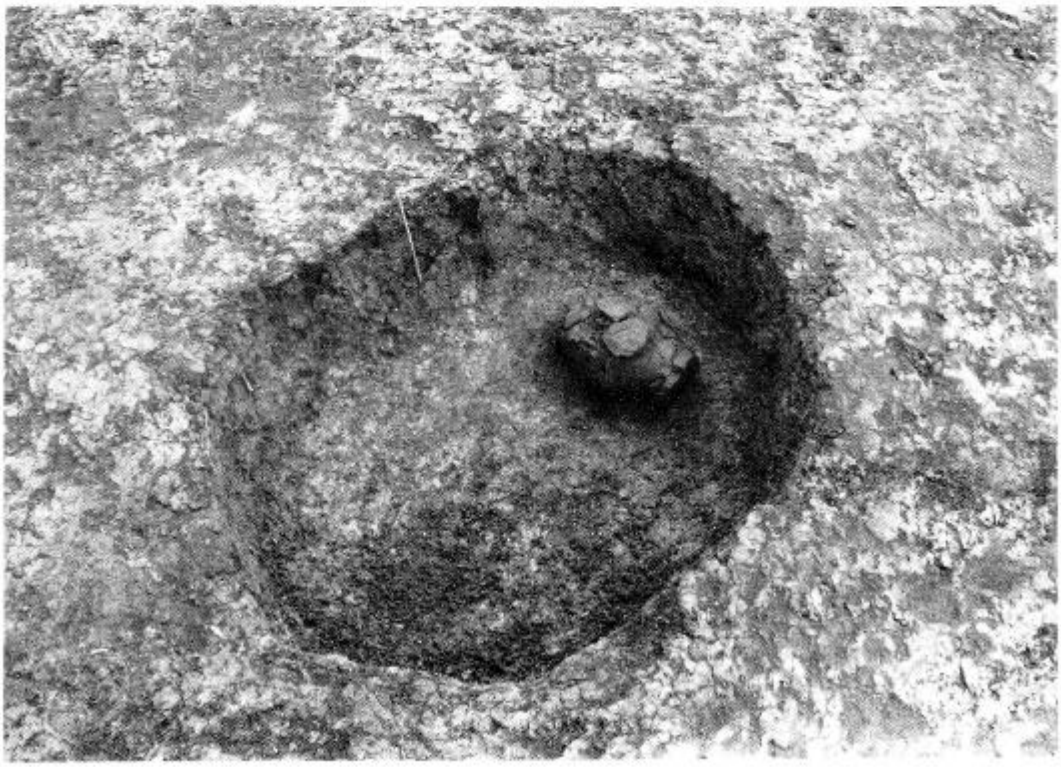
1　遺跡遠景(3)　（南東→北西）



2　遺跡から六郎沢館を望む　（東→西）

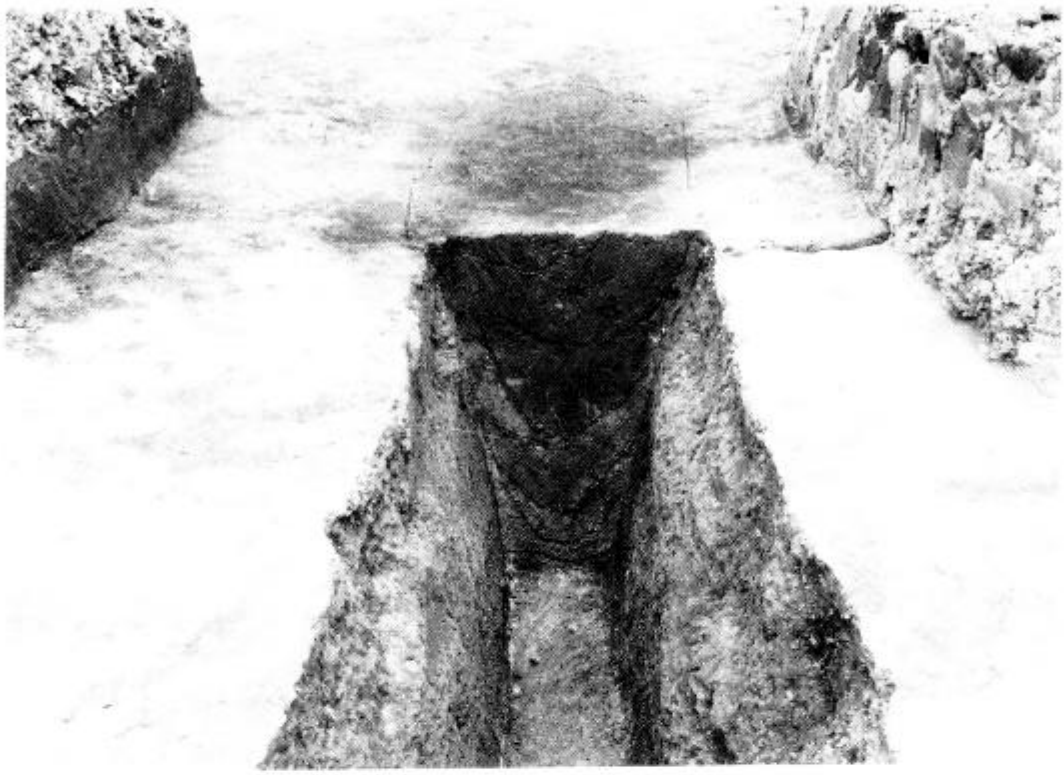


SI 0101竪穴住居跡完掘状況　（南→北）

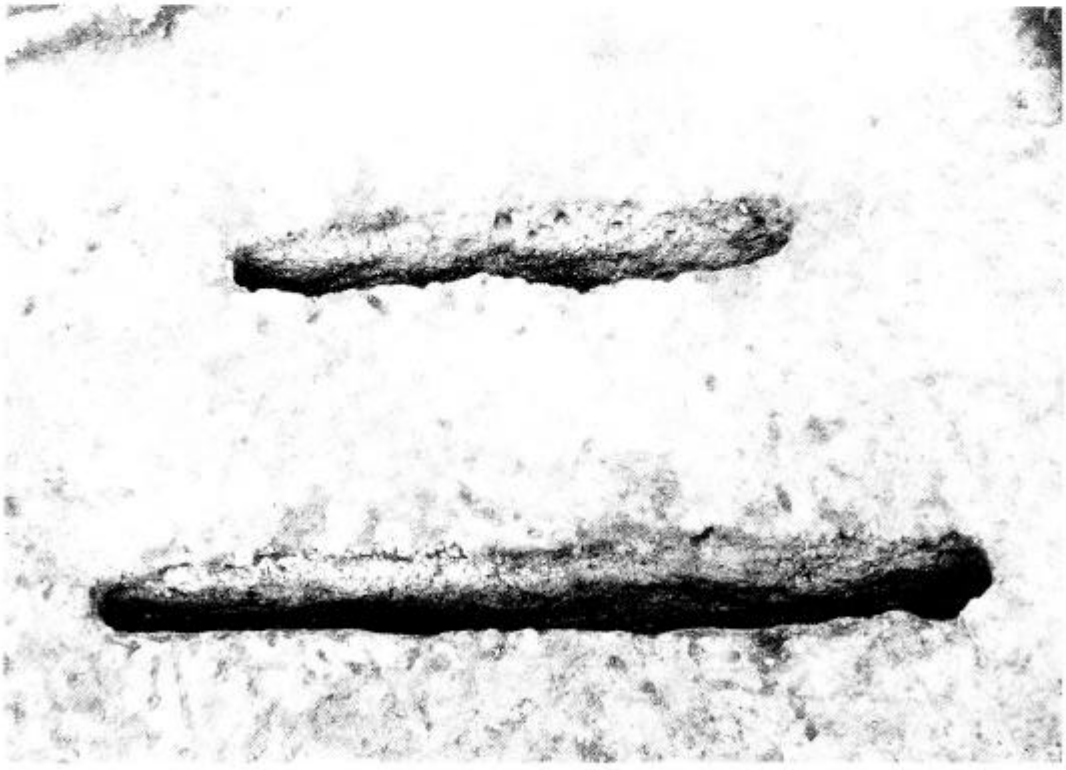


2　SK04土坑遺物出土状況　（南西→北東）

図版 4



1　SKT04陥し穴土層断面　（南東→北西）

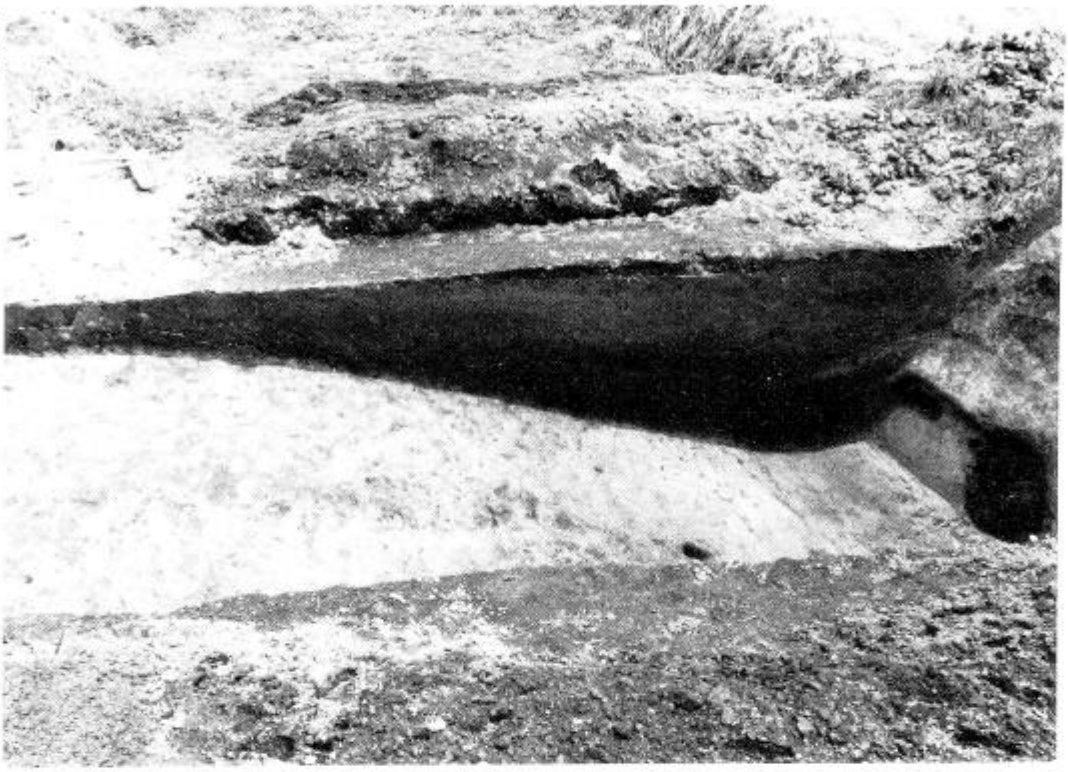


2　SKT01（上）・SKT02（下）完掘状況　（西→東）

1　SKT03完掘状況　（東→西）

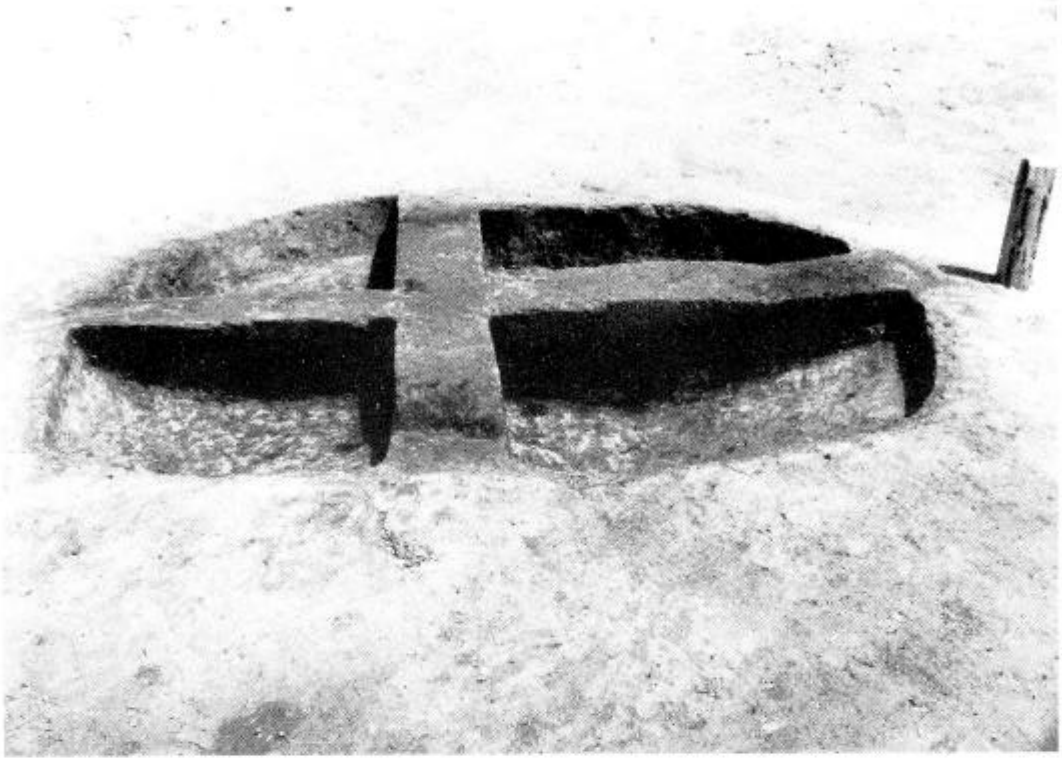
2　空堀調査前の状況　（西→東）

図版 6



1　空堀土層断面　（北西→南東）

2　空堀土層断面　（西→東）

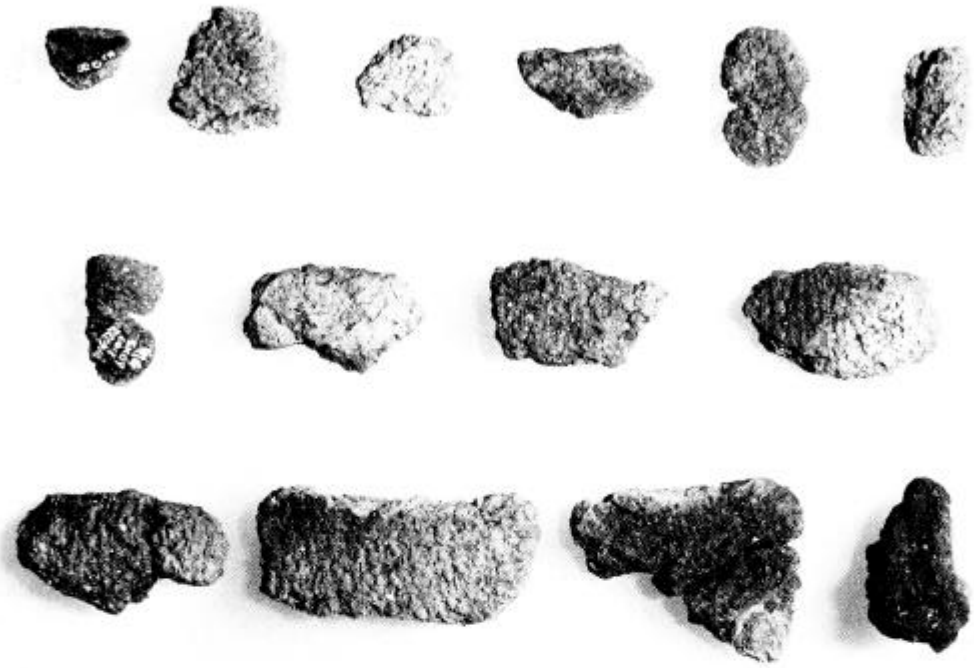


1　SK03土坑土層断面　（南→北）

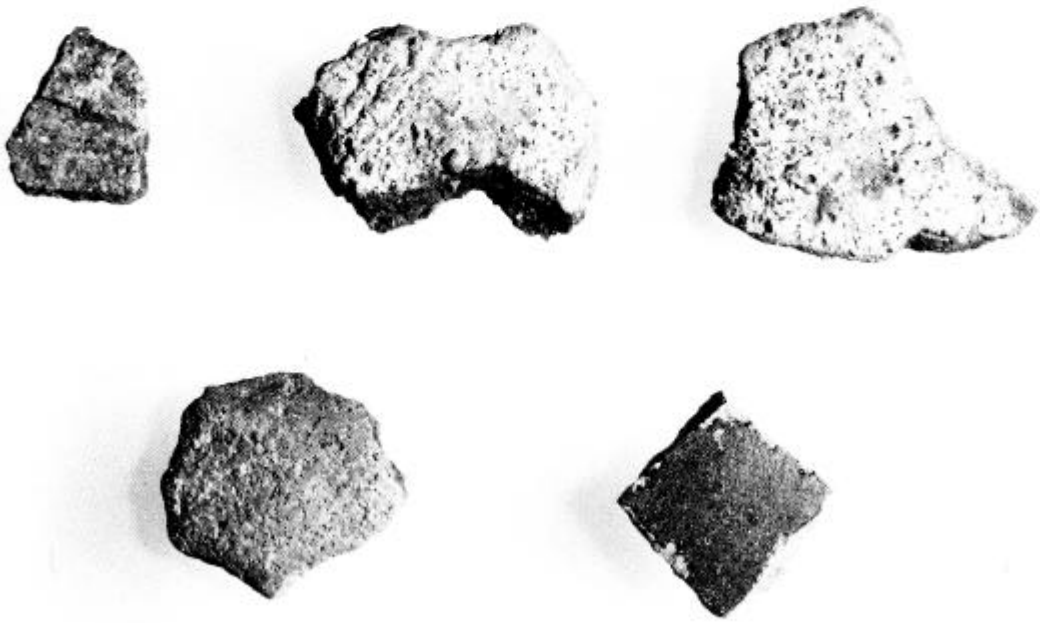
2　SK04土坑出土土器

図版8

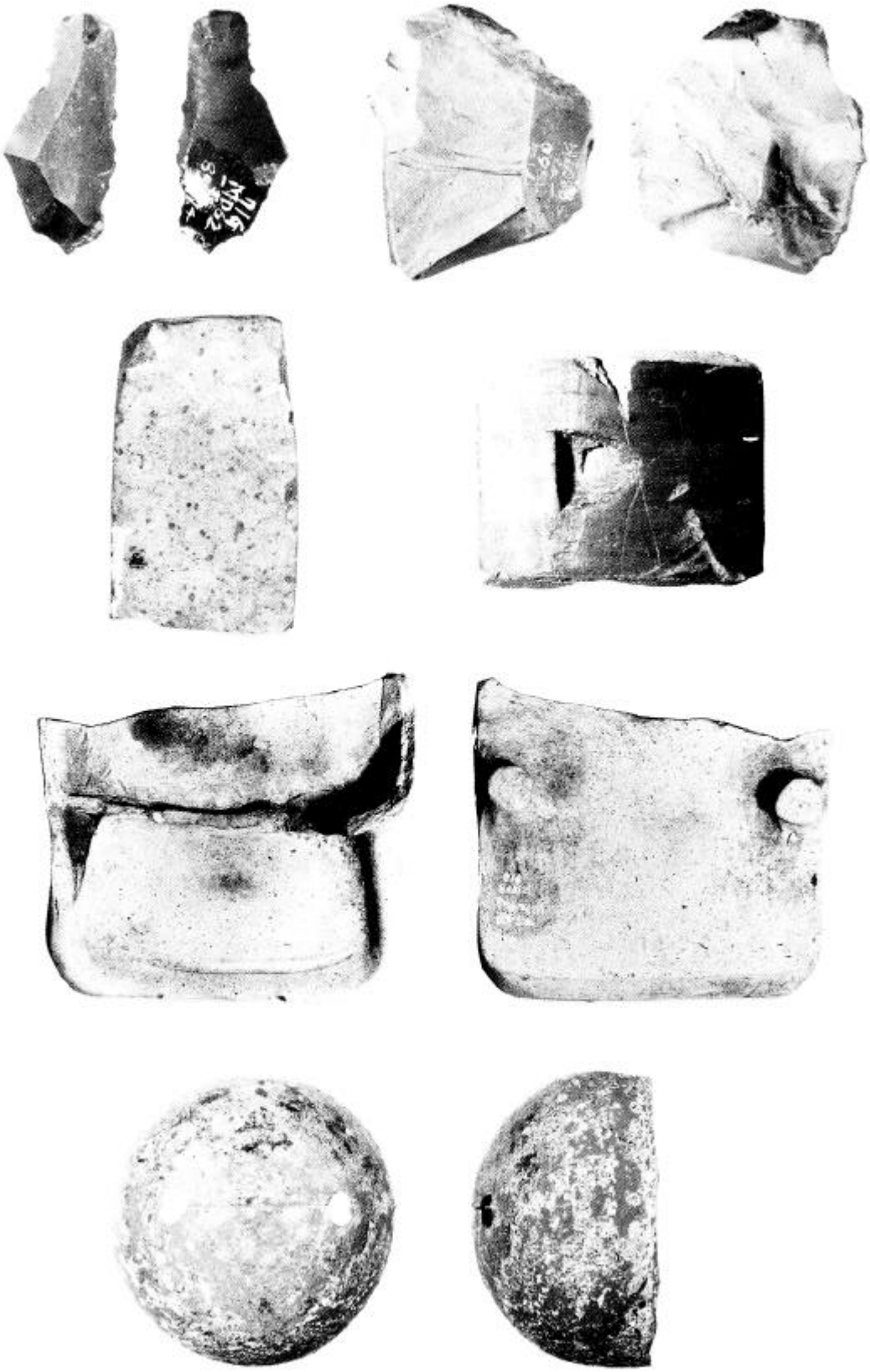
SK02土坑出土土器（上）・（下）



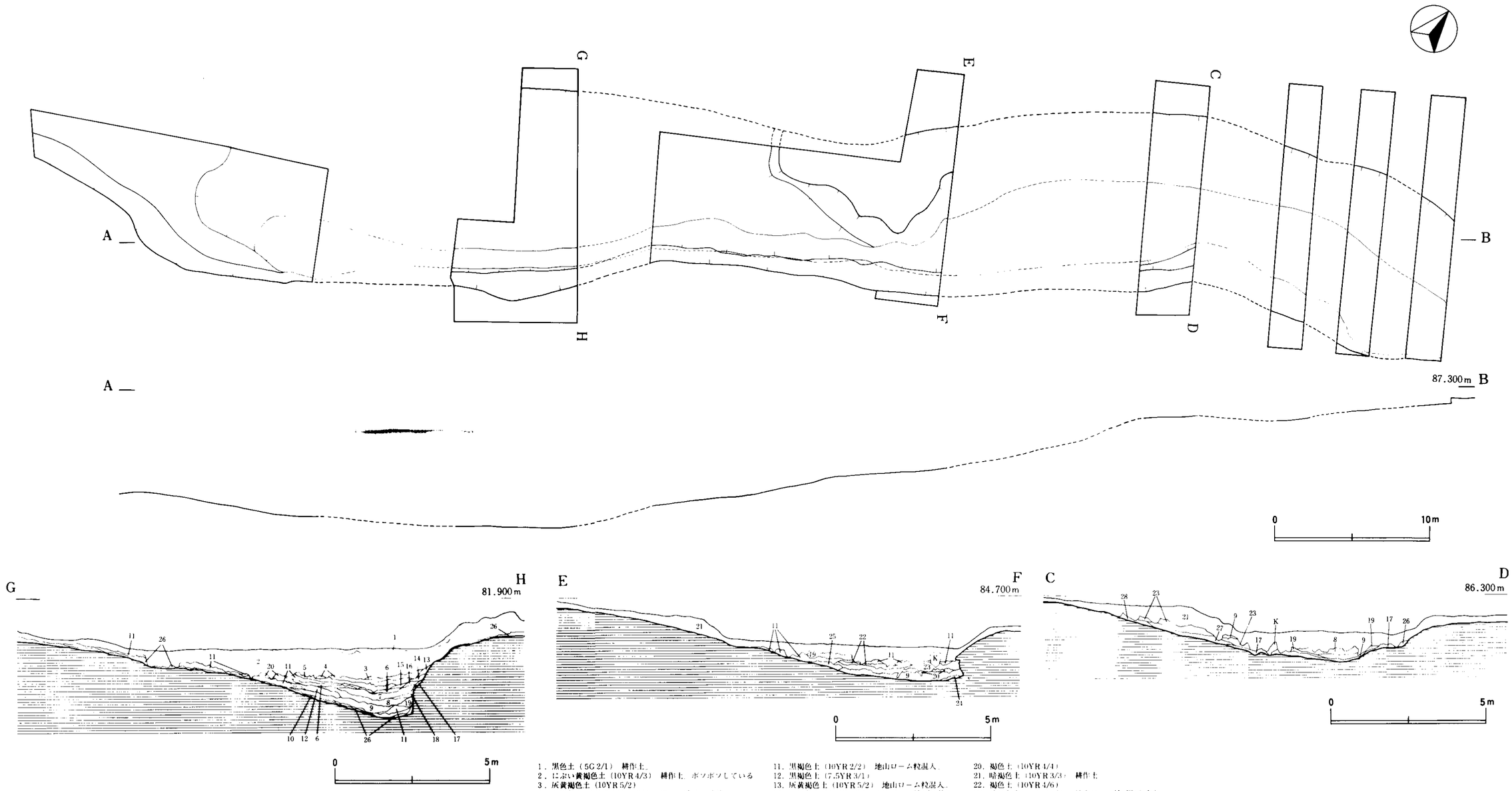
1　SK09土坑出土土器



2　遺構外出土土器



遺構外出土遺物



1．黒色土（5G 2/1）　耕作土。
2．にぶい黄褐色土（10YR 4/3）　耕作土。ボソボソしている
3．灰黄褐色土（10YR 5/2）
4．褐灰色土（10YR 4/1）　細かいローム粒子少量混入
5．オリーブ黒色土（10G3/2）　硬質。
6．黄橙色土（10YR 8/6）　硬質。
7．黒色土（10YR 2/1）　硬質。
8．黒褐色土（10YR 3/2）　しっとりしている
9．黒色土（10YR 2/1）　ローム粒少量混入。
10．にぶい黄橙色土（10YR 6/4）
11．黒褐色土（10YR 2/2）　地山ローム粒混入。
12．黒褐色土（7.5YR 3/1）
13．灰黄褐色土（10YR 5/2）　地山ローム粒混入。
14．褐灰色土（10YR 4/1）　地山ローム粒（中）混入。
15．にぶい黄橙色土（10YR 6/3）　硬質
16．明黄褐色土（10YR 7/6）
17．にぶい黄褐色土（10YR 5/4）
18．黄褐色土（10YR 5/6）
19．にぶい黄褐色土（10YR 4/3）
20．褐色土（10YR 4/4）
21．暗褐色土（10YR 3/3）　耕作土
22．褐色土（10YR 4/6）
23．暗褐色土（10YR 3/3）　地土ローム粒（細）を含む
24．明赤褐色土（7.5YR 5/6）
25．暗褐色土（10YR 3/4）
26．黄橙色土（10YR 7/8）　地山ローム。
27．黒褐色土（10YR 2/3）
28．明黄褐色土（2.5YR 6/6）

K……攪乱

SD02空堀実測図